

◎会費納入のお願い

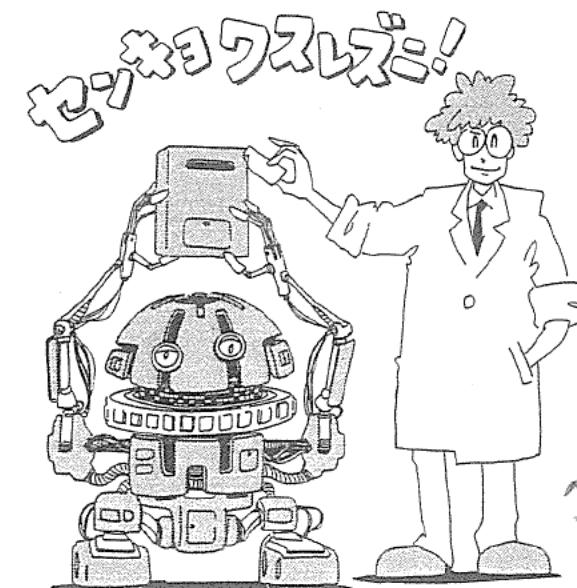
1985年度の会費納入状況が悪く、このままでは学会の運営に支障をきたします。お心あたりの方はすみやかにお支払い下さるようお願いします。

Sixth International Conference on Geochronology, Cosmochronology and Isotope Geology のお知らせ

来る1986年6月30日～7月4日英国Cambridgeにおいて上記国際会議が開催される予定です。既に会の内容、組織委員、宿泊、巡査などについての概略が紹介された1st Circular (Preliminary announcementと記されている)が配布されています。

1st Circularは〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3地質調査所 柴田 賢(電話0298(54)3557)あて御連絡いただければ、そのコピーをお送りします。更なる詳細については、Organizing Committee, I. C. O. G., Department of Earth Sciences, University of Cambridge, Downing Street, Cambridge CB2 3EQ, Great Britainにお問い合わせ下さい。

本会議の参加者へは地球化学会ニュース103号に掲載した要項に従い、渡航費の援助が行われます。希望者は申込み時期を失しないよう十分御注意下さい。



日本地球化学会1986・1987年度役員選挙
投票締切 10月12日

ニュース編集係より

○お詫び

本ニュース104号(前回発行)の6ページに掲載させていただいた御意見は長沢宏会員(学習院大学)から将来計画委員会アンケートに対して寄せられた御意見の一部(問9、10に対する部分)です。意見の出所が欠落していたことをお詫びし、ここに補足致します。

○ニュース記事や御意見をお寄せ下さい

本ニュースは年3回(大体1月、5月、9月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回106号は1月10日〆切、2月上旬発行の予定です。

編集者 田中 剛、清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298(54)3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(817)5801
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 106

1986. I. 30

Geochemical Journalをよくするために

—編集者の視点から—

雑誌をよくするということは、どういうことか。「雑誌をよくする」というのは、そこに掲載される論文のレベルを高くすることとともに、その雑誌を世界の一流誌に仕立てあげることです。後半の部分は、「いかにしてよい論文を集めることもできます。

1985年3月刊行の地質学雑誌のニュース欄に「地質学雑誌にのる論文をよくするために」という投稿が掲載されています。これは投稿者に対してよい論文を書くのにはどのようにすればよいかということを述べたものです。原稿を書くときに著者が考えなければならないことについては、上記の地質学雑誌を読んでいたくことにして、ここでは編集者の立場からよい論文を集めための方策について論じることにします。

G.J.が刊行されてから今年で20年になります。最初は年4回刊であったものが、1979年からは年6回刊となり、現在に至っています。年間の頁数は約300頁で、40～50篇の論文が掲載されていますが、この数字はここ数年来ほとんど変わっておりません。

G.J.が一流誌となるためには、地球化学者に注目される高いレベルの論文を数多く掲載することが必要です。そうなるために唯一確実な方法は、ともかく多くの論文が集まるようにすることです。そのためにはどのようにしたらよいでしょうか。

投稿数を増やすための努力

G.J.を読まなくては地球化学は語れないということになれば、だれもがG.J.に投稿しようと思うようになります。そうなれば編集者は楽なもので、投稿のなかからあるレベル以上のものだけを拾っていればよいのです。けれども現在のG.J.がそのようなことをしたら、雑誌はたちまちつぶれてしまうでしょう。そこで編集者は論文が集まつくるようにサービスをすることになります。

私が編集を担当するようになってから最も力を注いだ点は論文を受理してから印刷されるまでの所要時間を短縮することでした。そのために審査期間を2週間以内に限定するなど、かなり思い切った方針を打ち出しましたが、これは審査員の個人的な事情などもあって100%の実現には到っておりません。しかし障害というのはこれだけではありません。



なにが投稿論文の処理を長びかせているか

不備な原稿が送られてきたために、編集者のところで手間がかかることがあります。G.J.は詳しい投稿規定を出していますが、仕方がないところもあるのですが、投稿する以上は最新号を参考にして、それにならって原稿を作成するのが常識です。形式がG.J.のものから極端に逸脱している原稿は著者に返して書き直しを要求することもあります。規定された部数のコピーをつけてこないもの、文献の引用形式がG.J.のものと異なるもの、図や表が大きすぎるものなど、あげれば限界がありません。

審査のために送るときに苦労するような大きな図、文字や記号の書き方、配置などが適切でない図はいずれも編集者泣かせです。G.J.が真に国際的レベルと評価されているならば、このような問題のある図を含む原稿が送られてくることはないでしょう。

雑誌に掲載される論文のレベルを決定するのは審査

です。これは雑誌編集の上で最も重要な手続きでもありますので、このあとに項を改めて書くことにします。審査が済みますとその結果は編集委員長に報告されます。委員長はその内容を検討、整理して採否についての決定と一緒に著者に送ります。審査員のコメントに回答あるいは対応するためにかなり時間が要るような場合は止むを得ないのですが、簡単な修正要求に対してさえ、不思議なくらい著者からの返事が遅いことがあります。投稿者の怠慢で採用が遅れるのは編集する側の責任ではありませんが、こちらが忘れたころになって修正稿が送られてくると、旧稿と修正稿の両方を最初から見直すことになり、採用決定までの時間が長びります。

修正稿を送るときは審査員のコメントにどのように対応したかを説明する手紙を添えることです。これは編集者の負担を軽くし、処理時間を短縮する上で有効です。

審査員の役割

投稿された論文は然るべき審査員に送られます。審査にあたっては建設的な批判をして下さるようにお願いしておりますが、これはなかなか難しいことで、批判するほうは建設的な意見を述べた積りでも、著者のほうは全く別の受取り方をしがちです。審査員と著者の間に感情的なしこりが残らないようにするのが委員長の役目なのですが、下手をすると委員長もまきこまれて三つ巴の乱闘になってしまいます。

審査員から「G. J. の編集方針がはっきりしていないので論文の審査はできません」という断りの返事を貰ったこともあります。これは誠にもともと理由なのですが、こちらは文部省の刊行助成を受けていたる関係上、「G. J. は当分の間休刊」では済みません。相手を押み倒して、編集方針はこれまでの雑誌の内容から判断して下さいというだけです。

編集者のところに寄せられる苦情のうち、最も多いものは「早く審査結果を知らせろ」というものです。審査期間は2週間以内ということがなかなか守られません。遅れるときは「何日までには完成の予定」と審査員が連絡して下さると助かるのですが、それもなく、また催促してもなしのつぶてということさえあります。

もっともいくら早いのがよいといっても、まるで無責任な審査では話になりません。その論文をまた別の審査員に送ることになり、二重手間になってしまいます。またどんなによい審査であっても、時間が法外に

要ったのでは、著者に恨まれこそそれ、決して感謝されることはありません。

審査を依頼された方は投稿者の気持になって迅速に処理して下さるようお願いします。他方、投稿者は審査員のことを考えて、英文を含めて十分に推敲した原稿を送るようにして下さい。英文がトラブルの原因になることはしばしばです。何が書いてあるのかわからぬので審査がはからず、結果の報告が伸び延びになってしまった例もありました。この場合は「英文がわからぬので審査はできない」という注釈つきで原稿を送り返して貰った方が投稿者にとってもよかったです。

いろいろ注文をつけましたが、皆さんが論文の審査を依頼されたときはG. J. のためにご協力をお願い致します。

英語について一言

「英文はよくないが内容は立派という論文にいまだかってお目にかかったことがない。英文がよくない論文は内容もお粗末である」とある人がいました。残念ながら私も同じ意見です。英文に難がある論文に共通していることは引用文献が少ないか、あるいは和文のものだけに限られていることです。同じ研究分野の英語論文を読んでいればこのような書き方はしないであろうと感じることがあります。

G. J. は添削をしてくれるからという理由で英語が不完全な論文を投稿しないで下さい。土台が悪いものはいかに手を加えてもよい英文にはなりません。よくnative speaker にみてもらったから大丈夫と仰有る方がありますが、原稿が余りにひどいので彼氏は手をつけずに投げ出した可能性もあることをお忘れなく。

おわりに

私がG. J. の編集を担当するようになってもう4年が経ちました。編集について勝手なことを書かせていただいたのはこれが初めてです。お読みになって共鳴して下さる方、とんでもないと憤慨なさる方、さまざまなおられることでしょう。どうか今度は読者のみなさんがG. J. の編集について意見を仰有って下さい。G. J. のレベルアップには会員のみなさんが編集に関心をもって下さることが不可欠なのです。

(一国雅巳)



—編集事務の視点から—

Geochemical Journal が発刊されてから20年になろうとしている。私は14巻から Managing editor として編集事務の担当をしてきた。その間、この雑誌について数多くのクレームをきいてきた。最も多いクレームは投稿したが、或いは受理(accept)されたが伸び印刷出版されないというもの。つぎはミスプリントに関するものである。このような問題をできるだけ少なくするためにはどうしたらよいか? 編集事務の担当者として、本誌の編集、印刷の手順をのべ、そこにはどういう問題がある、その解決にはどうしたらよいかということについて、平素私が考えていることを記してみたい。

投稿された原稿が査読を終え、受理されると編集長(現在一国雅巳さん)から私の所に送られてくる。これは受理されたものであるからそのまま直ちに印刷にかかると思うと、そうはゆかない。一般の国際誌でも同様だが、そこには編集者のなにがしかの手が加わるのが普通である。雑誌によって、固有の文体(スタイル)に編集者が書き直すものもある。例えば文献や図表が本誌のフォーマットに合っているかのチェックとか、字体の指定、割りつけなどが行われる。しかしそも時間要るのは英文の添削である。具体的にはもう一人の Managing editor の小穴進也名誉会員が発刊行来これに当っておられる。失礼ない方であるが、小穴先生は英語に堪能すぎて、日本人の思考に基づいて書かれた英語、いわゆる Japanese English を理解することが不得手である。一つの文章を何日も考えられることがある。どうしても分らないときには著者に直接電話されることもあるが、みな忙しいので中々つかまらない。そうなると、そこで修正業務が停滞することになる。思い余って私に相談されることもあるが、この種の英語が私に分ることもあり、この場合には一件落着する。もちろん身近な専門家に相談して解決したことあった。それでも分らないと小穴先生なり私なりが著者を探して電話することになる。

原稿は受理順に印刷することを原則としているから、このように問題の原稿をとばして他を優先させることは一般にはやらない。順番をくずすことは極く稀である。つまり一台の事故車が道をふさぎ、交通停滞をひき起こすのと同じである。従って、できるだけ英語らしい英語を書くことが雑誌をスムーズに出す要件であると思って頂きたい。上記のように一台の事故車は他人にも迷惑をかけるのである。

何年にも亘って莫大な労力を投入した研究が論文を上げる段階でこのようになるのは大変残念な

ことである。日本人が英語で論文をかくことはそれほど容易なことではない。英語国民とは思考形態が異なるから、中々いい英文がかけずに苦労するのは当たり前である。しかし、論文をよくするために、その研究にかけた労力なり費用なりの何分の1かを費すことは必要なことであろう。投稿される前に是非一度、身近な英文に堪能な自然学者(native speakerならなおよいが)にみて貰うことをおすすめしたい。1対1で分りにくいところを直してゆけば、かなりよい論文となると思われる。国際誌の中で、英語を母国語としない投稿者は予め英文の修正を義務づけているものもある。どうしても身近に適任者がいないときは直接小穴先生にお願いする方法もある。

英語だけでなく論文の内容や構成の問題は実はさらに大きい。しかし、これは審査の問題なのでここには詳しく触れるつもりはない。しかし、若い人の論文で指導者に謝辞がかけられていたり、連名になっていたりするものでひどいものがある。指導者が形式的にしか目を通さなかったか、またはその人自身に問題があるのであろう。指導者は後進を教育する義務があるのでから、論文についても適切な指導をするのが当たり前ではなかろうか。論文を印刷公表して初めて研究は完成するものであるから、もしもこの段階で適切な指導が欠けている場合、連名や謝辞は外すべきであろう。

Geochemical Journal の英文の修正をもっと寛大にすべきだという声もきく。しかし、本誌は日本で出版されている地学関係の雑誌のうち国際的に評価されている数少ないものの一つである。Science Citation Indexには増田彰正前編集長のお骨折で登録誌になっている。また Current Contents に収録されているものは日本では本誌の他に Journal of Geomagnetism and Geoelectricity があるにすぎない。このように本誌の高い国際的評価を支えるためにも内容、英文ともに高い水準を保つ必要がある。これには小穴先生のお力が大きく与っているものと私は考えている。この種の問題は他の学会でも議論されていて、例えば最近の地質学雑誌に河内洋佑氏(91巻, p. 240)と長谷中利昭氏(91巻, p. 745)の御意見が載っているので御一読をすすめたい。

論文は、構成、英文もさることながら体裁上の整合性が要求される。このチェックは私の仕事の一つである。例えば図や表が本文と矛盾していないか、引用文献はどうかといったことである。本文と引用文献の整合性に問題がない論文は残念ながら半数以下である。本文で引用されているのにリストにないもの、或いはその逆のもの、年号や人名が合わないものが余りにも

多い。私の所で調査できるものは調べて訂正するが、身近にない文献はどうしようもない。著者校正のとき直してもらうことになる。私の経験からいくと、内容、構成、英文、何れも立派なものはほどこの種のミスは少ない。論文作製に対する熱意の表れであろう。投稿される前にはこの種の充分なチェックをお願いしたい。引用の形式も同じである。

このようにして手を加えた原稿は印刷屋に廻ることになるが、初校は著者校正となる。初校の訂正が余りにも多いときには著者再校をお願いすることもあるが、原則として、2校、3校はこの初校に基づいて私が行う。従って初校で問題があると後はそのままになってしまうから初校には充分注意をして頂きたい。学会によっては最初の原稿と2校、3校との照合チェックをやることもあるが、本会の場合、そこまではカンペーン願っている。それにこの段階で原稿は著者に返送してしまっている。

2校以後にミスが出ることが従来あった。つまり初校ではパスしたものが、再校の段階で一行ぬけたりするもので、これは初校をかなりいじったことからくる技術的な問題なのである。いまは技術が変わったので、この種のトラブルは少なくなったが、最近19巻、3号でまたそれが出た。このような場合、本誌に訂正文を出すので、気づかれた場合は御指摘頂きたい。また別刷は作り直すことができる。ページの入れ違いが起ったこともある。これは著者が初校を返送するときに誤って綴じたため、そのまま2校、3校と通ってしまった。コピーなどして返送される前に是非もう一度目を通して頂きたい。

著者校正の段階で図の縮小率が気に入らないとか、原図のミスをみつけたから訂正したいとかいうクレームもある。これにはできるだけ御希望に添うようにしているので、遠慮なくお申出頂きたい。印刷した表の中で行や列が合わないこともよく起るが、表の原稿はできるだけ明確に作ってもらい度い。学会によっては原図と同じようにそのまま印刷可能な原表を要求するところもあるが、一つの課題であろう。

3校のときには表紙や目次を含めたものを作り、これをパスすると本印刷となる。また各巻が完結すると、私の所で総目次と索引を作れる。

Managing editor の所で原稿が完成してから著者校正などを行い、最後に印刷が完了するまで最低2ヶ月を要する。こうして出来た雑誌は印刷屋（名古屋）から学会センターに送られ、それから会員に配布されるので、さらに半月はかかる。英文修正などの期間を入れると受理（accept）から会員配布まで4～8ヶ月と

いうのが大体の所要時間である。これは他の学会や国際雑誌に比べてとくにおそい方ではない。

私はこの他別刷に関する事務も担当している。従来は別刷も学会センターから配布されるので、著者の手許に着くのがずい分おそくなり、クレームがついたことがある。今年度からは印刷屋から直接著者宛に送ることになったので、むしろ本誌より早く著者の許に到着しているはずである。別刷送付先や代金請求先を連名の著者毎に分けてくれということもあるが、できれば代表者を一名に絞って貰った方が問題は少い。代金の回収業務は庶務幹事（小椋和子さん）の手を患うこととなるが、とくに外国向けの場合にはヤッカイことが多い。

以上のように高々数10ページの雑誌ができ上るのにかなりの労力が要ることがお分り頂けたと思う。本来の職務をもつていながら、これだけのことを大過なくやってゆくのはかなり大変なことだと自分では思っている。しかし、本誌を少しでもよくするためににはそれなりのギセイも必要であろう。本誌の編集事務のことで御意見や御希望があればおきかせ頂きたい。本誌をよくするために是非とり入れてゆきたいと考えている。

（杉崎隆一）



学会の顔 Geochemical Journalについて、一国雅巳編集長と杉崎隆一編集幹事から記事をいただきました。刷上った誌面からそれを推察することは困難ですが、Journal の維持・発展には、著者に加えて編集者の隠れた大きな支えがあることがわかります。会誌を良くすることについては本会以外でも日本地質学会が“地質学雑誌にのる論文をよくするために”（地質学雑誌91巻3号-1985）を掲載しているほか、日本天文学会が日本天文学会欧文報告誌の発展のためにと題して、天文月報78巻7号（1985）に、特に国内から外国誌への論文流出問題をとりあげ、討論を行っています。特に後者で取り上げられた現象は、地球科学系の1.5流国際商業誌がいくつか創刊された昨今、G.J.にも感じられるところです。『G.J.を良くするために』、御意見、御提案をお待ちしております。

（ニュース編集係）

1984—1985年度将来計画委員会報告書

今期の将計委は、予算ゼロという状況下のためもあり、特定の委員を置かず、何名かの世話人、評議員と委員長との間での通信という形で審議が進められた。したがって、対立する意見等はすべて委員長が取捨選択したものであり、以下の文章の責任もすべて委員長のみに帰するものである。

——委員長 角皆静男——

日本地球化学会は、1963年に地球化学研究会（1953年発足）が発展的に解消して生まれた。その頃、会員数は約300名であった。その後、会員数は順調にふえ、1975年末には800名に近づいた。ところが、次の10年間、会員数は頭打ちの状態になり、現在でも860余名に過ぎない。

会員数が増加しない学会は珍しくはないが、本学会のように比較的小人数で、発展途上にある（あるはずの）学会の伸びなやみは、学会内にその存亡にかかわるような問題がある。その一面が現れた結果のようにもみえる。実際それと関係する具体的な問題が、直接あるいは間接的に評議員会に寄せられるようになってきた。

今期の将来計画委員会に課せられた任務は、現在、本学会が直面している問題のうち、将来の日本の地球化学に深く関係しそうな問題を拾い出し、それに対する最善の方策を提言するところにあった。したがって、ここでとりあげる事項としては、日本の地球化学の長期的理想的像を追求するようなものではなく、我々が現在ただちにその解決に向って努力できるような、足下にある問題に限ることにした。例えば、16年前の地球化学将来計画委員会は、地球化学科や大学院地球化学コースの設置をうたっており、現在でも大方はそれに異議のないことであろう。しかしながら、16年経ってもそれは実現されていない。それは、多分、それにいたる過程の中に存在する多数の障壁を乗り越える力に不足していたためであろう。今期考えたことは、むしろ、そのような頂に達するためには、どのようにして足腰を鍛えるかといった類の事柄である。

1984年秋に行なったアンケート調査の結果によると、日本における地球化学（会）は偏っており、地学（地質学）関係者とともに欧米型の地球化学を発展させるべきとする声も確かに多かった。この岩石圈を中心とし、Geochemistry という用語から連想される地球化学を狭義の地球化学と呼ぶことになると、もう一つ広義の地球化学と呼べるものがある。それは、大気

圈、水圈、生物圏などを岩石圈と同等にみなし、大気科学、海洋科学、水文学（陸水学）、生態学、環境科学などの化学的侧面を含める地球化学である。過去の日本の地球化学の特色は、この後者の立場に立っていたといってよいであろう。ところが、最近の年会の分野別発表件数の割合や退会者の分野別割合などを見ると、日本の地球化学の拡がりはむしろ小さくなっているように見える。例えば、陸水学関係の割合の減少などがみられる。本報告書は、将来も日本において地球化学のすべての分野がともに進展すべきものであるとする態度で書かれている。いいかえれば、ある特定の分野に肩入れするようなことは考えていないということである。

1 学会の拡大（会員数の増加）

会員数の増加は、学会が直面しているすべての問題に多かれ少なかれ関係しており、重要な課題である。例えば、会員が増えれば、財政状況が好転して会費値上げが避けられるとか、学術会議への発言力が増して研究環境が改善されるとかいった間接的な事柄もある。地学関係者、陸水環境科学関係者、高校や大学における化学教育担当者、学生などを中心に学会が拡大しうる余地は十分に残されていると考えられる。

その方策は、和文誌や各種行事を通して本学会を魅力あるものとする地道な活動が第一であるが、その存在を知らなかったり、入会の機会を失している者に入会しやすくする努力も必要であろう。例えば、和文誌に入会申込書を付けること、入会案内のパンフレットをつくって配ること、会員紹介者に奨励金（物）または何らかの特典を与えること、年会や講演会で呼びかけることなどがある。

2 学会の財政的基盤の確立

本学会のような学際領域の学会においては、複数の学会に加入している会員が多い。それゆえ、会費値上げのみによって財政問題を解決することは難しい。現在、財政委員会においてこの問題は検討されているが、出費を押えた結果、各種の事業（例えば和文誌の増刊）が資金難で実行できなくなり、将来が先細りになるようなことは避けなければならない。

会員数の増大によってこの問題のかなりの部分は解消する。財政委員会の努力によって広告料がはいるようになってきたが、さらに賛助会員の増大へつながることを期待したい。

1984年度決算を見ると、会費収入503万円に対し、刊行物売り上げ金と助成金を差し引いた出版費が340万円、行事費24万円、名簿積立金25万円、事務管理費233万円が支出である。以下に述べる多彩な活動を行なうためには、欧文誌が特定学術刊行物に昇格して助成金を増やすこと、受益者（著者等）も応分の負担をすることなどが必要であろう。将来、本会によって教科書や一般啓蒙書の出版ができるようになれば、一石二鳥以上の効果が生まれるだろう。

3 学会賞の創設

賞を授与された者が受ける恩恵は、間接的にもかなり大きく、学会への求心力が働くもともなる。一方で、方向を誤ると弊害も出やすい。それらの点を考慮して次のような賞を提案する。いずれも賞状一枚程度のもので、副賞等で学会の財政状況を圧迫するものとはしない。

a) 奨励賞（仮称） 35才以下の若手研究者への賞とする。評議員会内に選考委員会を設け、毎年一名を表彰する。

b) GJ賞（仮称） 過去3年間程度の欧文誌への投稿論文の中から選ぶ。選考は編集委員（外国人含む）の投票を中心とする。これには欧文誌の質的量的向上をはかる意図もある。

4 学生会員の優遇と終身会員制の創設

a) 学生会員 現在も会費の面で優遇されているが、将来の担い手に対する優遇策をさらに考えたい。例えば、学生や若手研究者が主催する事業への補助金の支出、和文誌等に学位論文や卒業論文の題目を掲載するなどしてその紹介に努めること、就職のあっせんを行なうこと、若手研究者育成のための事業の実施などである。なお、現行の学生会員の認定方法にはあいまいな点が多い。

b) 終身会員 長期会員として活動していただきながら通常会員のままでいる者と名誉会員になった者との差はあまりに大きい。そのために退会した会員も多い。経験豊富な会員に残ってもらい、その知恵を借りることも本会の発展にとって有益であろう。それで、例えば、「年齢+会員歴が90年以上で、公職から退いた者は、本人からの申し出により、会費を免除」という終身会員制を提案する。

5 欧文誌（Geochemical Journal）の発展

欧文誌は、本会の質的レベルを代表するものであり、世界に我々の地球化学を報らせる重要な媒体である。

しかし、残念ながら、改善されてはきたが、米国などでは世界の一流誌とは見ておらず、サーキュレーションも今一歩である。

差し当たっての努力目標は、文部省科研費刊行物補助金の補助率が高くなる特定学術刊行物の指定を受けることであろう。特定学術刊行物となる資格で現在欠けている点は、年間ページ数が500（現在350ページ）と外国への有償配付数が500部または発行部数の30%（現在330部）以上という条件である。

増ページの点は、サーキュレーションがよくなれば自然に解決することであるが、審査方法の改善（欠点を探そうとするよりは、よい所を伸ばそうとするレフェリーの態度）、投稿から発行までの時間の短縮など、スピーディーで気持のよい審査ができるれば問題ないであろう。学会誌であるから、経験不足で不慣れな投稿者に対する編集委員の教育的配慮も期待したい。

増ページによる会費へのね返りは、販売部数の増加、広告収入、受益者負担によってできるだけ避けたいものである。

結局、外国への販売部数が将来の発展の鍵となるものと思われる。購入申込書付でサンプルや総索引を送って、図書館等での購入を促すとともに、外国人会員や投稿者の増加を呼びかける必要がある。

6 和文誌の改革

和文誌には広く一般会員に役立つ記事を載せ、これによって地球化学の普及をはかる。原著論文のほかに、総説、解説、講座、話題等の企画を盛り込む。さらに、ニュースと合体させ、年4号以上の発行をする。

原著論文の査読や経常的記事を担当する常任の編集委員のほかに、毎号臨時の企画担当編集委員を置き、その斬新なアイデアで企画した記事に相当数のページを割く。臨時の企画担当編集委員は原則として毎号交代する。

差し当って行なうことは、編集委員を増員して企画記事の検討をすることと出版経費の手当である。会費値上げを契機にして実施すれば、数年後には会費や広告料の増加となってはね返り、以後の財政状況が好転する可能性がある。

7 年会と各種行事

a) 年会 他学会に比べ、会員数に対する年会での発表件数の割合が大きいという特徴がある。その結果、会場数がふえ、同種の講演が同時に他会場で行なわれる場合も出た。これを解消するためには、春季発表会を実施する必要がある。差し当たっては、春季は

他学会と共にシンポジウムを中心とする会（分野別に複数でもよい）の開催が考えられる。

b) 例会 現状は、出席者が少なく、評議員以外はほとんど在京者である。それゆえ、早めに計画し、ニュース等で報らせれば、ハガキ代は節約できる。学会外への公開講演会の色彩を強めてもよいように思われる。

c) 外国人研究者等によるセミナーの謝礼の補助 地方で開かれる小規模なセミナーに対し、少額でも補助すれば、全国の会員にメリットを与えることになる。

8 部会活動（研究部会、教育部会、支部）

地球化学も地球物理学と同様、その学問的性格により研究対象は相互にかなり異なる場合が多い。それゆえ、研究領域の似たものや、逆に研究手段を同一にする者同志が研究部会をつくり、研鑽し、部会同志が競争すれば、本会そのものの活力が高められるであろう。

また、高校レベルを中心とする教育部会を設け、高校教育への提言、クラブ活動の援助などを行なえば、底辺の拡大、将来の人材確保などが期待される。大学において魅力ある講義を行なうための資料を提供、教科書の作製なども考えたい。

さらに、地域毎の支部は、たとえ小規模であっても、地域社会における資源や環境の問題との対応、学生対象の講習会や講演会、セミナーや研究会の開催など、きめ細かな活動ができ、本会の足腰を強くするうえで重要な役割を担うことになる。

9 学術会議と研究環境対策

アンケート調査などにおいて会員、特に若手会員から出される強い要望は、研究できるポストの増加である。これは一朝一夕で解決できるような問題ではないが、我々の学問の重要性を広く認識させるような活動を一歩一歩行なうことと、そのようなことを発言できる場に有力な会員を送り込むことから始めるべきだろう。

a) 学術会議関係

新しい学術会議の運営においては、研究者個人より学会の比重が大きくなっている。その傾向は今後もますます強くなるであろう。本学会の意見を反映できる学術会議会員が選出されるよう努力することはもちろん、関連する研究連絡委員会（研連）を通しての活発な活動が重要であろう。

そのため、本学会が推薦した地球化学宇宙化学研連の委員ばかりでなく、本学会会員で学術会議会員や他研連の委員になっている者による連絡会を評議員会内

に設け、会長等が加わって、具体的方策や行動計画を練ることが望ましい。

b) 文部省科学研究費対策

大学関係予算において、いわゆる校費は頭打ちの状態にあるが、科研費は毎年伸びている。しかし、個人的研究よりグループ研究が重視されるようになってきた。昭和62年度より実施される予定の重点領域研究の設定もその一例であろう。これに対処するため、学会内に研究費委員会をつくり、グループ研究の仲立ちなどをすることが必要である。

c) 研究ポスト増対策

ポスト増に対する即効的対策の立案は難しいが、会長（幹事会）は、これに関する情報の収集に努めること、各大学等の概算要求作製の際の相談に応じ、応援すること、優秀な若手研究者の発掘に務め、地球化学が関係する公募等のポストが生じた時には積極的に推薦することなどを行うべきである。

10 地域社会・産業面・マスコミとの対応

地球化学は、資源や環境の問題など社会的ニーズの少くない学問である。しかし、これに対する学会員の態度は両端に分かれている。したがって、地域社会とのつながりなど、本学会が全体としてとりあげるというよりは、部会や支部活動として行なう方が適当と考えられる。

また、科学的記事が正確でない場合が多いため、マスコミ嫌いの研究者は少なくないが、地球物理学における例をみるとまでもなく、その力は研究面や研究環境の改善にまで影響をおよぼしている。研究の第一線を若手研究者に任せた経験豊富な研究者がこの面で活躍してくれることを期待したい。

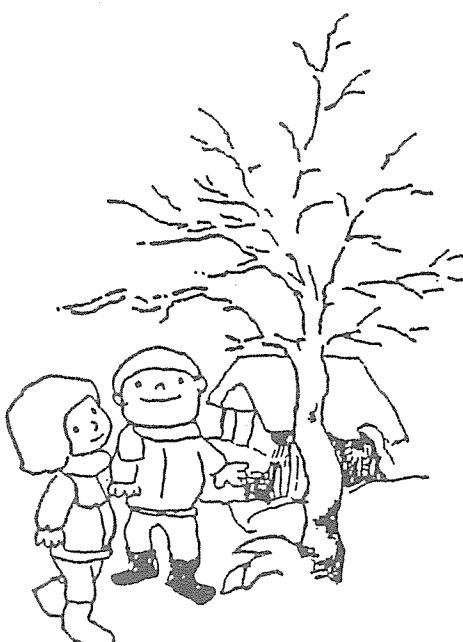
11 教科書・一般啓蒙書・専門書の発行

出版物の役割は、単にその学問を目指す者の参考にするためだけではなく、その学問の重要性、有用性を広く社会や学界に知らせ、優秀な仲間を得て、さらに大きく発展させるところにある。そのための教科書や一般啓蒙書の発行は、むしろ個人的なレベルの問題であり、多数の試みが平行的に進められる方が健全かもしれないが、本会もできる限りその仲介や応援をすることが望ましい。

用語集、辞典、地球化学的試料の調整・分析法等の専門書の出版も考えられる。

幸い今期の将来委をきっかけに、あるいはそれとは無関係に、この種の出版物が発行されたり、計画されたりしている。もしこれらが成功するようだったら、

本会が中心となって組織的出版事業を行ってもよいと考える。これらの印税の一部を学会でプールすることにすれば、本会の財政にも一役買う可能性が残されている。



有機地球化学研究会が発足しました

地球上には有機物の関与する現象が多くあります。有機地球化学は、これらの現象や地球化学諸過程にはたず有機物の役割を有機物の量や質に焦点をあてて研究する分野ですが、世界的にもますます盛んになりつつあります。有機地球化学国際会議は、1962年にイタリアで第1回が開催されてから昨年まで12回を数え、また国際誌“Organic Geochemistry”(Pergamon Press)も1977年より発刊されています。

この度、日本に“有機地球化学研究会”が正式に発足しましたのでお知らせ致します。昨年の地球化学会年会での夜間小集会で会則を定め、初代会長として田口一雄(東北大理)氏を選びました。

この会はもともと、この分野の研究の交流を目的として1972年に有機地球化学談話会として発足したもので、さらにこの分野の研究を盛んにすべく“談話会”を発展的に改称したものです。

これまで研究会は2年に1回有機地球化学シンポジウムを開いています。昨年は第7回シンポジウムを帝國石油kk技研で開きました。課題討論は“石油探査における有機地球化学の役割”でした。これまでのシンポジウムの講演内容は“Researches in Organic Geochemistry”(和文)にまとめられ、第4巻まで発行されています。昨年のシンポジウムの内容も第5巻として今年中には発行される予定です。その他の研究会の活動としてニュースレターを発行しています。

研究会は生まれたばかりで、会員数は約100名です。会および研究の発展のためにご支援をお願いします。入会をご希望の方(年会費は1000円)、研究会についてお知りになりたい方は、下記の運営委員または事務局にお問い合わせ下さい。

運営委員：相原安津夫(九大理)、秋山雅彦(北大理)、石渡良志(都立大理)、市原優子(大阪市大理)、工藤修治(石油資源技研)、佐藤俊二(石油公團技セ)、島田豊郎(島根大理)、下山晃(筑波大化学)、田口一雄(会長:東北大理)、半田暢彦(名大水研)、藤田嘉彦(帝石技研)、米谷宏(地調)

事務局：東京都世田谷区深沢2-1-1
東京都立大学理学部分析化学研究室内・有機地球化学研究会(事務局代表:石渡良志) Tel: 03-717-0111

○第6回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議派遣研究者応募要領について

本田奨励金選考委員会は、1986年6月30日から7月4日、英國 Cambridge で開催される標記国際会議に出席する者に対して、下記により渡航費の援助を行います。

(1) 応募資格 1946年1月1日以降出生の国内研究者。ただし、1st Authorとして二つ以上の論文を申し込むことはできません。(国内研究者とは、対象となる研究の主要部分を国内の研究機関で行ったものと指す。国籍は問わない。)

(2) 派遣研究者の数と援助額約10名程度に総額300万円以内。

(3) 報告義務 帰国後、簡単な報告をうけます。

(4) 選考方法 応募者は、1985年度質量分析学会同位体比部会研究会(1986年3月13-15日、箱根静雲荘)において国際会議発表予定論文を英語で口頭発表(講演20分+討論10分を予定)していただき、選考委員会(小嶋委員長以下10名)で派遣候補者を選考いたします。内定者の中から、国際会議のプログラム決定後に最終決定をいたします。

(5) 応募方法 Cambridge へ送る Abstract Form のコピーを添え、2月15日までに同位体比部会研究会の申し込み用紙とともに提出してください。詳細については下記にお問い合わせ下さい。

〒133 東京都文京区弥生2-11-16

東京大学理学部地球物理学教室

小嶋 稔 (TEL 03-812-2111 内4300)

(柴田 賢)

○朝日学術奨励金

昭和61年度の標記奨励金の候補研究を募集しています。

締切: 2月28日

申込先: 〒104 東京都中央区築地5-3-2

朝日新聞東京本社企画第2部

○多摩川およびその流域の環境問題に関する基礎研究・応用研究・計画研究

標記研究を応募しています。締切は本来は1月末日ですが、ニュースの発行に間に合いませんので、2月末日までは応募を認めることになっています。

問い合わせ先: 〒150 渋谷区渋谷1-16-14

財団法人 とうきゅう環境浄化財団

Tel: 03-400-9142

第23回 理工学における同位元素研究発表会

会期 昭和61年7月1日(火)～7月3日(木)

会場 国立教育会館

(東京都千代田区霞が関3-2-3)

(1) 内容 それぞれの研究分野において、その専門的成果を得るにいたった放射性および安定の同位元素ならびに放射線の利用の技術に重点を置いた論文と、これら同位元素、放射線の利用の基礎となる研究論文とします。研究の内容には、少なくとも一部に未発表の部分が含まれていることを必要とします。

なお、発表は口頭発表とポスター発表とします。

(2) 発表申込区分

- ① 基礎的データ
- ② 放射線測定器・測定法
- ③ 分析(放射化分析、放射化学分析、等)
- ④ トレーーサー利用
- ⑤ 照射効果
- ⑥ 製造・分離・標識化
- ⑦ 線源・加速器
- ⑧ 放射線利用機器(ラジオグラフィ、エネルギーの利用、発光塗料等も含む)
- ⑨ 陽電子消滅、メスバウア効果
- ⑩ 放射線管理(汚染除去、健康管理、安全取扱、廃棄物処理、運搬、等)
- ⑪ 地球科学・宇宙科学・環境科学
- ⑫ 安定同位元素関係
- ⑬ その他

(3) 口頭発表時間 1件15分以内の予定

(4) ポスター発表 今回は特にテーマを設けておりません。どの申込区分の応募でも結構です。1件のスペースは90cm×150cm×2枚です。ポスター掲示時間のうち責任時間は1.5時間を予定しています。

発表者の資格 発表申込者が所属する主催学・協会の年会(大会)等の規定または慣例に従う。

発表申込み 所定の申込書(1件1通)によりお申込み下さい。所定の申込書は下記あて請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

☎ (03) 946-7111(代) 内線261

発表申込締切: 昭和61年2月28日(金)必着

講演要旨 講演要旨集を発行します。発表申込みがあり次第、所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表、ポスター発表とも1件原稿用紙1枚です。

講演要旨原稿締切り: 昭和61年4月15日(火)必着



名誉会員

野口喜三雄先生

一国雅巳



名誉会員

岩崎岩次先生

鎌田政明



名誉会員

浜口 博先生

松尾禎士



名誉会員

渡辺武男先生

北野 康

野口先生は1906年長野県にお生まれになり、本年80才になります。先生は1932年に東京帝国大学理学部化学科を卒業され、引き続いて大学院に進学され、柴田雄次先生の指導のもとで火山ガス、温泉の地球化学的研究に専念されました。1937年に同大学助手、1947年に助教授になられ、1949年東京都立大学の発足とともに教授として迎えられました。1969年同大学を退官されるまで、温泉、火山を中心とした多くの研究を手掛けられるとともに、多数の後進の指導にもあたられました。1970年には東邦大学に移られ、1976年に定年で退官された後も地球化学の研究を続けておられます。

先生は日本地球化学会の創立当時からの会員で、評議員、監事を歴任されました。

先生のご研究のうち、1940年ごろに行われた間欠泉の噴出に伴う温泉水の組成変化の解析はとくに著名であり、これによって間欠泉の噴出機構が明らかとなりました。東京都立大学に移られてからは、火山ガスの分析によって浅間山、大島三原山の噴火予知の研究を進められる傍ら、都内河川水の調査、地下鉄車両内の空気の汚染など今日の環境化学研究の走りともいえる仕事もなさいました。また松代地震のときは何回も現地に足を運ばれ、多数の湧き水を調査されました。秋田県玉川温泉は先生のお気に入りのフィールドの一つで、そこに産出する赤色の沈殿物が鉛を含んだヒ素の硫化物であることを確認されたことも先生の大きな業績であります。

先生は常々「私の健康の秘訣は旅行である」と仰有っておられます。そのお言葉の通り、在職中はもちろん、ご退官後も国内ばかりではなく、海外各地へ調査や会議のために出かけられました。現在はご自宅でこれまでの膨大な成果をまとめておられると仰有っております。先生がいつまでもお元気で研究をお続けになることを祈っております。

先生は明治42年新潟市での御出生である。昭和8年東京帝国大学理学部化学科を御卒業、九州大学、東京工業大学の教授を歴任されて昭和45年定年退官されたが、同年4月東邦大学理学部に移られ、昭和55年まで在職された。現在でも日本工業用水協会顧問、水質分析所長として活躍しておられる。

地球化学との最初のかかわりは昭和7年の苗木地方の温泉水中のラドン測定にはじまり、翌年の伊豆大島火山三原山噴火孔の探査調査とつづいている。

分析化学全般、水質分析全般の業績も多いが、珪酸塩の分析、河川水の分析など地球化学関連のものが多い。地球化学に関係した最初の論文は伊豆大島火山の溶岩の化学組成（日化誌、56）が最初であり、昭和30年代までマグマ、火山岩、鉱物関係などのものがつづいた。その後、二、三の火山の噴気孔の活動状態（日化誌、57）にはじまる火山ガス、一般に火山発散物の研究が多数の門下生にも引き継がれて今日まで発展した。温泉の研究も放射能泉、強放射能泉、間歇泉を中心に行なわれたが、現職でも明らかなように工業用水についてもはやくから関心を払われ、環境汚染に気をくばりつつ有効合理的な水資源利用に留意されたことは先見の明のたしかさを証するものであろう。自然への接し方、取り組み方も独特であり、たしかな実証にもとづくという方針で、フィールドにもまめに足を運ばれ「肉体派」と呼ばれることが多かった。また基礎教育にはきわめて御熱心であった。

地球化学会生みの親の一人であり、昭和28年から昭和45年度まで評議員をつとめられたが、日本環境測定分析協会、日本温泉科学会、日本分析化学会および日本火山学会の各名誉会員につづいて昭和60年10月本会の名誉会員に推挙された。先生は多くの弟子にめぐまれたが、声望を慕って内地留学等で弟子入りしたものが多いのも包容力ある先生の御人柄を物語るものである。先般「喜寿のお祝い」が東京であり、小生もはせ参じその盛会さに感動したものである。益々の御壯健を心から祈って止まない。

浜口 博先生は1915年1月18日に伊勢において出生され、1937年東大理学部化学科を木村健二郎先生の御指導のもとで御卒業になり、一年を大学院で過ごされた後、1938年秋田鉱山専門学校に赴任されました。1943年に理学博士の学位を取得された後、第一高等学校教授を経て1947年から東京文理科大学助教授、1952年東京教育大学教授、1964年から東大教授に転じられ1975年に定年退官されました。その後直ちに日本分析センター理事長に就任され今日に至っておられます。その間、1966年には「放射化分析に関する研究」によって日本分析化学会賞を受賞され、また1982年には「放射化分析技術の開発」により科学技術長官賞を受賞、1985年には紫綬褒章を授与されました。

先生の輝かしい御経歴は、正に先生の業績と人柄の反映に外なりません。かりに先生の業績のうち一つを取りあげるとすると、1954～1956年にかけてシカゴ大学に滞在されていた間に完成されたコンドライト中のウランの放射化分析の結果でしょう。後に放射化分析の一つの規範とさえ評価された厳格な分析操作の結果、先生は Reed および Turkevich の協力のもとに従来のウランの分析値はほぼ10倍高すぎることを1957年に指摘されました。この分析値と Th/U, K/U 比の推定値を組みあわせて得られる地球の熱流量の計算値は実測値とよく一致し、地球はコンドライト物質で代替しうることが後に認められました。この認識はその後流動化しましたが、先生の業績の歴史的意義にはいさかの影響もありません。

先生は自己を語ることを好まれませんが、先生の存在そのものが弟子および周辺の人々に強い影響を与えたという点で、先生の力量と人格が窺われます。研究・教育の面だけでなく、先生は学会の発展のため多大の精力をさかれ、本会に対しても長年にわたって評議員を務められ、1972～1973年にかけては会長として尽力されました。先生を敬愛する者一人として、今後益々の御活躍と後進への御鞭撻を期待しております。蛇足ながら筆者はせめて先生の甚の力量に一歩でも近づけることを念願しております。

渡辺武男先生は1931年東京帝国大学理学部地質学科を御卒業、北海道帝国大学理学部助手、講師、助教授を経て1942年教授となられた。つづいて東京（帝国）大学教授（1944～68年）、名古屋大学教授（1968～71年）、秋田大学学長（1971～76年）を歴任された。

1966年“新鉱物の発見”で学士院賞受賞、1972年には学士院会員。この間、東京大学理学部長、日本学術会議第4部長、日本鉱山地質学会、日本地質学会、日本鉱物学会の各会長。International Association on the Genesis of Ore Deposits の副会長。Economic Geology 誌の Associate editor, Geochim. et. Cosmochim. Acta 創刊時からの Editorial advisor。1963～73年日本地球化学会評議員など、など。地球化学・宇宙化学が国際的にも国内的にもその座を確立するに至った経緯は菅原健先生の書に詳しい（たまゆら、1965）。それこそ終始渡辺先生が菅原健、三宅泰雄先生を御援助下さったことが、つぶさにわかる。

渡辺先生と Kotoite（小藤石）、 $Mg_3(BO_3)_2$ 卒論以来のフィールドであった北朝鮮の遂安金山で先生が見つけた鉱物を顕微鏡下で初めは透輝石 ($CaMgSi_2O_6$) だと思いこんだという。しかし化学分析をすると Si が含まれてはいない。1937年、ベルリンでの Paul Randohr 教授との出遭いが1939年。それを $Mg_3(BO_3)_2$ と同定させ、新鉱物 Kotoite の発見に連なるドラマは感動的である。 NO_3^- , CO_3^{2-} , BO_3^{3-} は同じ構造をもち、それらの鉱物には共通点がある。 $CaCO_3$ を生涯のテーマとした私は、渡辺先生との連なりをそんな所に見出し、多くの教訓を頂いた。1年に3～5ヶの鉱山を歩かれた先生は鉱山全体としての化学元素の動きに常に注目されたと聞いた。そしてその都度採集試料は多くて重かったと先生のお弟子さんから聞いた。学生に講われば何をしていても顕微鏡下での薄片観察を優先させた先生の穏やかな印象はしかし強烈鮮明である。私はこの紹介記事用に御写真をお願いした。暫らくして、“……適当なものがございませんでした。撮り直しましたので……” というお便りとともにお送り頂いたのが、この御写真（1985年10月25日撮影）である。

1985年度第2回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1985年6月1日 17時～20時

場所：赤門学士会館

出席者：松尾禎士会長、増田彰正副会長、安部喜也、小椋和子、小倉紀雄、金森悟、兼島清、川辺岩夫、北野康、佐藤和郎、椎川誠、清水洋、田口一雄、田中剛、角皆静男、中井信之、野崎義行、野津憲治、脇田宏各評議員、鳥居鉄也監事、大隅多加志幹事

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 庶務（小椋評議員）

*昭和60年3月27日付で、本会は特許法第30条第1項の規定に基づく学術団体の指定を、特許庁長官より受けた。

*昭和60年度の文部省研究成果刊行費補助金が135万円と内定した（昨年度は157万円）。

*（財）日本学会事務センターと1985年の事務業務委託の契約をした。

2. 会計（野津評議員）

*1984年度決算の監査をうけ、適正であると認められた。

3. 編集・ニュース

（小倉評議員）G.J. Vol. 19のNo.1は6月中旬、No.2は7月上旬に、それぞれ校正完了の予定。10月中旬までにNo.4までを発行できる予定。「地球化学」18巻2号は発送済。19巻1号を編集中。

（田中評議員）ニュース103号・104号は、将来計画委員会アンケート回答機関へ送付した。105号は、原稿締め切り8月5日で9月はじめに会員が年会プログラムを手にできるよう編集したい。ニュースの印刷所を変え、その結果1000部あたりページ単価が14500円から8500円に節減できた。

4. 行事（松久評議員に代わって田中評議員）

*1985年6月例会を6月1日午後実施した。テーマは「サンゴ礁および海水準変動をめぐる最近の話題」。小西健二氏に「サンゴ礁によるネオテクトニズムと古環境解析」、松本英二氏に「海水準変動とハイドロアイソスター」の演題でそれぞれお話し願った。出席者は、25名うち会員は17名であった。

5. 1984年度年会会計報告（半田年会実行委員長に代わって小椋評議員）

*要旨集売上358部、決算額2,306,133円であった。な

お参加者数は、会員253名（うち学生会員28名）・非会員95名（うち学生69名）であった。

6. 1985年度年会実行委員会（東野委員長に代わって田中評議員）

*すでにニュースによりお知らせした通り準備が進んでいる。

7. 日本学術会議（松尾会長）

*5月20日の推薦人会議に出席した。本会より選定した会員候補者増田氏は、「地質科学総合」研連からの会員として推薦されなかった。席上、将来この研連が地質科学でなく「地球科学総合」として地学系の総合研連として機能すべきであるとの議論がなされた。

*5月21日の地球化学・宇宙化学研究連絡委員会に出席した。第13期の委員構成につき論議、本会へは3名の委員を推薦依頼することとなった。

8. 広告委員会（増田副会長）

*G.J.、「地球化学」および会員名簿に広告を掲載する件は順調に進んでいる。評議員の方々にも協力願いたい。

9. 将来計画委員会（角皆評議員）

*角皆・小倉・鈴木の3人で検討し和文誌改革（原著論文以外の記事も載せる・ニュースとの合体・編集委員の交代制など）の原案を次回評議員会に提出する予定である。

III. 議事

1. 入退会（小椋評議員）

*入会12名：石川賢一、橋本哲夫、宇都浩三、矢吹英雄、朴木英治、青山拓、豊田和弘、結田康一、中根周歩、早瀬光司、矢彦沢清光、下島公紀

*退会10名：浜村憲克、小平達郎、杉浦吉雄、高井雄、中村久子、宮口克二、逸見吉之助、掘川武夫、深瀬茂

以上を承認。会員現況は以下のとおり。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1984年12月31日	863	12	3	878
入会	12	0	0	12
退会	10	0	0	10
1985年3月31日	865	12	3	880

2. 名誉会員の推薦

*会則における名誉会員規定制定の経緯についての議論ののち、今後幹事会でこの規定の変更をふくめた検討をおこなうこととした。

*「名誉会員推薦に関する内規（1979年9月30日評議員会承認）」を確認ののち、会員野口喜三雄氏、会員岩崎岩次氏、会員浜口博氏のそれぞれにつき順次推

薦理由の説明・無記名投票をおこなった。その結果、各氏とも20名全員の賛成で次回総会に名誉会員候補者としての評議員会提案することとした。

3. 日本学術会議の本会関連の研究連絡委員会への委員推薦

1) 陸水研究連絡委員会委員として小倉紀雄氏を推薦することにつき会長より事後承認を求める件、挙手により賛成多数（19人）で承認。

2) 鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会への本会推薦委員1名につき自薦・他薦を受付、会長より提案のあった松久幸敬氏を挙手により全員賛成で推薦することとした。

3) 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会への推薦3名および補欠候補者2名の選出については、会員候補者増田氏、現IAGC評議員木越氏が推薦され、また委員の専攻分野のバランスも考慮すべきであるとの意見も出された。5名連記の無記名投票で決することとし、以下の結果を得た。

木越邦彦氏：19票

増田彰正氏：18票

角皆静男氏：9票

本田雅健氏：9票

松尾禎士氏：9票

石渡良忠氏：8票（次点）

ついで補欠およびその順位を決めるため3位の得票者3名につき単記無記名投票（金森・北野・中井3評議員途中退席のため現員17名）により、角皆9票・本田4票・松尾3票・無効1票の結果を得た。よって本会推薦の委員候補者として木越・増田・角皆3氏、補欠1位に本田氏、同2位に松尾氏を選出した。

4. その他

*鳥居監事より賛助会員の勧誘書類をととのえて評議員が活用できるようにしてはどうかとの提案があり、庶務幹事が早急に用意することとした。

1985年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1985年10月16日17時～21時

場所：筑波研究学園都市「ホテルグランド東雲」

出席者：松尾禎士会長、増田彰正副会長、安部喜也、一国雅巳、小椋和子、金森悟、兼島清、川辺岩夫、北野康、佐藤和郎、清水洋、鈴木款、田口一雄、田中剛、角皆静男、東野徳夫、中井信之、能田成、野崎義行、野津憲治、松久幸敬各評議員

鳥居鉄也監事、大隅多加志幹事

I. 前回の議事録を一部訂正のうえ承認した。

II. 報告事項

1. 庶務（小椋評議員）

*会員名簿を作成した。価格を1部5000円に設定した。

*賛助会員勧誘のためのパンフレットを作成した。

2. 編集・ニュース

（一国評議員）

*G.J. Vol. 19(4)は遅れているが、10月中に発行の予定。同巻は3号までで180ページ19編。手持ち原稿は20編。年内にVol. 19を出し切るようにしたい。

*「地球化学」19巻は1/2号合併号として日々発行の予定。

（田中評議員）

*ニュース105号は年会プログラムが内容。106号は、1月10日原稿締め切り。

3. 行事

（松久評議員）

*1986年度年会は富山大学理学部で実行委員長水谷義彦氏に引き受けいただけた。

（東野評議員）

*1985年度年会は講演数237件で、予定どおり実施。

4. 日本学術会議（松尾会長）

*本会からの第13期研連委員推薦は、以下の通り。

地球化学・宇宙化学研連：木越・増田・角皆・本田各氏

鉱物学研連鉱床学専門委員会：松久氏

陸水研連：小倉氏

海洋科学研連：酒井氏

5. 広告委員会（増田副会長）

*12社より広告が取れた。105万円の増収となった。

III. 議事

1. 入退会（小椋評議員）

*入会 賛助会員2名：日本分析センター、三啓社；正会員28名：河内晋平・比屋根肇・中山英一郎・榎原忠政・岩熊敏夫・橋本卓三・野尻幸宏・森本隆夫・上岡晃・高橋正明・永淵修・秋山勝芳・才野敏郎・田中敦・甘利幸子・永本浩之・本多照幸・滝上豊・原宏・和田雄高・横田喜一郎・高橋和也・成田尚史・長尾誠也・本多牧生・三好登和子・高田秀重・池田保夫

*退会 賛助会員1名：三菱金属資源事業部資源部正会員4名：大竹千代子・隈本正顕・西川賢之・長島弘三

以上を承認。会員現況は以下のとおり。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年3月31日	865	12	3	880
入会	28	2	0	30
退会	4	1	0	5
1985年8月31日	889	13	3	905

2. 役員選挙結果の承認

*選挙管理委員会の野津評議員から以下の報告を受けこれを承認。10月14日地質調査所で開票の結果、投票総数207、うち有効投票数190であった。役員選挙細則にしたがって1986・1987年度本会役員として会長・副会長・監事・各1名、評議員22名を選出した。

*選挙管理業務中に役員選挙細則の不備がいくつか明らかになった事が報告され、野津評議員の提案により、「役員選挙細則改正検討委員会」を、選挙管理委員会のメンバーで発足させ、次回新旧合同評議員会に答申をすることとした。

3. 1985年度日本地球化学会総会について

*小椋評議員より、次第の説明があり了承した。

4. 1984年度事業および決算報告について

*小椋・野津両評議員より説明があり了承した。

5. 1985年度事業および会計中間報告について

*小椋・野津両評議員より説明があり了承した。

6. 1986年度事業計画および予算案について

*小椋評議員より事業計画の説明があり、これを了承した。

*野津評議員の予算原案について意見を交換。予備費および基本財産充当引当金にそれぞれ50万円計上する修正案が示されこれを了承した。

7. 1984-1985年度日本地球化学会将来計画委員会報告書について（角皆評議員）

*報告書案の内容にわたっての質疑があり、さらに今後の取り扱い方につき検討。各評議員からの意見は10月中に角皆委員長あてに寄せることとし、委員長に最終の取りまとめを一任。この報告書を次号のニュースに将来計画委員長名で掲載することとした。

8. 名誉会員推薦について

*4名の推薦評議員を代表して北野評議員から、渡辺武男会員を本会名誉会員として推薦する理由の説明があった。無記名投票の結果、21名の全員賛成で総会に渡辺武男会員の名誉会員推挙の評議員会提案することとなった。

1985年度日本地球化学会総会報告

- 議事次第
1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会委員長挨拶
5. 名誉会員の推挙（本誌10~11ページに紹介記事）
6. 1984年度事業および決算報告
7. 1985年度事業中間報告
8. 学術会議関係
9. 1985年度会計中間報告
10. 規約改正（第5条および第6条）
11. 1986年度事業計画および予算案
12. 1986-1987年度役員選出結果
13. その他
14. 閉会

1985年度日本地球化学会総会は10月18日（金）、工業技術院の共用講堂で16時から17時に開催された。出席者は約70名であった。議長に水谷義彦氏（富山大学）が選出された。5.の名誉会員について、松尾会長より、理由が述べられ、野口喜三雄、岩崎岩次、浜口博、渡辺武男各会員の名誉会員の推挙が会場にはかられた結果、それぞれ承認された。なお、浜口会員には会場で直接名誉会員証が手渡された。6.では、1984年度の決算報告の説明の後、鳥居監事による監査報告が行なわれ、事業および決算報告が承認された。

8.では、会長より、第13期学術会議会員選出に関する当学会の取り組みと結果についての説明があった。

昨年の総会で会員候補および推薦人選出の委託を受けた評議員会は会員候補に増田彰正氏を、推薦人に北野氏および松尾氏を選び、推薦人会議に臨んだが、会員としての選出は他の学会の人に決定された。

（なお、関連研究連絡委員会は地質科学総合である。）

10.の規約改正は、ここ2、3年前から折につけ、財政難を訴えてきたが、財政委員会委員長の増田氏により会費の値上げが提案された。正会員会費は6000円から8000円に、学生会員は4000円から6000円に値上げする（第6条）。また入会金が1000円から2000円（第5条）に値上げする。以上について若干のやりとりがあったが承認された。来年度から実施される。12.の1986-1987年度役員選出結果が選挙管理委員長の野津氏より報告された。

役員選出結果

会長：増田彰正

副会長：一国雅巳

監事：鳥居鉄也

評議員：秋山雅彦、石渡良志、大隅多加志、梶原良道、金森悟、兼岡一郎、鎌田政明、川辺岩夫、木越邦彦、酒井均、佐藤和郎、清水洋、杉崎隆一、坪田博行、中井信之、中山英一郎、野崎義行、松葉谷治、松久幸敬、松本英二、水谷義彦、綿拔邦彦

1. 会費収入

5,030,775円

正会員	4,501,000
学生会員	160,000
賛助会員	150,000
海外会員	191,775
入会金	28,000

2. 刊行物売上	4,045,482
----------	-----------

Back No.	3,293,670
別刷	751,812

3. 広告料	0
--------	---

4. 助成金	1,570,000
--------	-----------

5. 名簿積立金	500,000
----------	---------

6. 雑収入	44,285
--------	--------

7. 前年度繰越金	2,487,171
-----------	-----------

計 13,677,713円

1984年度事業報告

1. 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1983年12月31日	872	12	2	886
入会	30	0	0	30
退会	38	0	0	38
変更	-1	0	+1	0
1984年12月31日	863	12	3	878

2. 年会、委員会等開催数

年会 1回（10/18-20、名古屋）、総会 1回（10/19、名古屋）、例会 2回（2/25, 6/16、東京）、評議員会 3回（2/25, 6/16, 10/17）、幹事会 2回（4/4, 9/8、東京）、財政委員会 2回、会誌編集委員会 2回、ニュース発行委員会 3回、行事委員会 2回、将来計画委員会 4回

3. 会誌発行

G.J. Vol. 17 (5, 6), Vol. 18 (1~6)
地球化学 Vol. 17 (2), Vol. 18 (1, 2)

4. ニュース発行

Nos. 100, 101, 102, (計32ページ)

5. 第13期学術会議会員選出のための学術団体の登録

6. 学会共催

第21回理工学における同位元素研究発表会
(7/2-4)

7. 例会

2/25 高温の初期海洋にまつわる 2, 3 の問題
松尾禎士氏

6/16 液相不混和領域における元素の分配

1) ケイ酸塩メルト間の元素の分配 氏家治氏
2) ケイ酸塩メルトと流体相間の元素の分配 浦辺徹郎氏

8. 現金預金

現金 8,094円
預金 2,190,156

学会事務センター	1,362,151
----------	-----------

計 3,560,401円

1984年度決算報告書

収支決算書（自1984年1月1日至1984年12月31日）

収入の部

現金 8,094円

預金 2,190,156

学会事務センター	1,362,151
----------	-----------

計 3,560,401円

負債・正味財産の部	
負 債	2,227,000
前受会費	1,477,000
名簿積立金	750,000
正味財産	1,333,401
計	3,560,401円

1985年度事業中間報告 (1985年9月30日現在)

1. 会員状況 (1985年8月末現在)				
正会員	賛助会員	名譽会員	計	
1984年12月31日	863	12	3	878
入会	40	2	0	42
退会	14	1	0	15
1985年8月末	889	13	3	905
2. 会年, 委員会等開催数				
年会 1回 (10/17-19, 筑波), 総会 1回 (10/18, 筑波), 例会 2回 (2/2, 6/1, 東京), 評議員会 3回 (2/2, 6/1, 10/16)				
幹事会 2回 (4/4, 9/24, 東京), 会誌編集委員会 2回, ニュース発行委員会 3回, 行事委員会 2回, 将来計画委員会 1回, 広告委員会 2回, 財政委員会 2回				
3. 会誌発行				
G.J. Vol. 19 (1~3), 地球化学 Vol. 19 (1/2)				
4. ニュース発行				
Nos. 103, 104, 105 (計44ページ)				
5. 名簿発行				
6. 1986-1987年度役員選出				
7. 学術会議会員推薦候補者および推薦人の選出および届出				
8. 学会共催				
1) 昭和60年度質量分析連合討論会 5/16~18 (豊橋市)				
2) 第22回理工学における同位元素研究発表会 7/1~3 (東京)				
3) 第1回 ESR 年代測定国際シンポジウム 9/1~4 (宇都宮)				
4) International Seminar on Laterite (IGCP PROJECT) Oct. 14-17 (1985) (東京)				
9. 例会 2/2 地球化学図				
1) 地球化学図とは—その作製法と人間環境のインデックスとしての役割 椎川 誠氏				

2) 地質調査所における地球化学図作製計画	伊藤司郎氏
6/1 サンゴ礁および海水準変動をめぐる最近の話題	
1) サンゴ礁によるネオテクトニズムと古環境解析	小西健二氏
2) 海水準変動とハイドロアイソスター	松本英二氏
1985年度会計中間報告 (1985年6月30日現在)	
収入の部	
科 目	金額 (円) (予算, 円)
1. 会費収入	4,916,709 (5,000,000)
2. 刊行物売上	2,237,498 (4,300,000)
3. 広 告 料	0 (100,000)
4. 助 成 金	0 (1,600,000)
5. 雑 収 入	14,984 (40,000)
6. 前年度名簿積立金	750,000 (750,000)
7. 國際会議預金利息	0 (570,000)
8. 前年度繰越金	1,333,401 (700,000)
計	9,252,790 (13,060,000)
支出の部	
科 目	
1. 事 業 費	
1.1 出 版 費	2,170,926 (9,000,000)
1.2 行 事 費	53,000 (270,000)
1.3 名簿積立金	0 (0)
1.4 名簿作成費	0 (60,000)
1.5 会員業務委託費	0 (1,450,000)
1.6 会員業務郵税	30,820 (370,000)
事業費小計	2,254,746 (11,690,000)
2. 管理費	
2.1 庶務費	0 (200,000)
2.2 会議費	102,099 (150,000)
2.3 通信費	52,770 (30,000)
2.4 旅 費	251,000 (400,000)
2.5 選 挙 費	0 (100,000)
2.6 雜 費	51,520 (100,000)
2.7 会誌保管料	0 (171,600)
管理費小計	457,389 (1,151,600)
3. 基本財産充当引当金	0 (0)
4. 次年度繰越金	— (218,400)
計	2,712,135 (13,060,000)

1986年度事業計画

1. 年会 1回 (富山)
2. 総会 1回 (富山)
3. 例会 2回
4. 評議員会 3回
5. 幹事会 2回
6. 会誌発行
G.J. Vol. 20 (1-6)
地球化学 Vol. 20 (1, 2)
7. ニュース発行
3号 (Nos. 106-108)
8. 学会共催
第23回理工学における同位元素研究発表会
9. その他

1986年度予算

収入の部	
科 目	金額 (円) (前年度予算案, 円)
1. 会費収入	6,600,000 (5,000,000)
2. 刊行物売上	5,000,000 (4,300,000)
3. 広 告 料	500,000 (100,000)
4. 助 成 金	1,500,000 (1,600,000)
5. 雑 収 入	30,000 (40,000)
6. 前年度名簿積立金	0 (750,000)
7. 國際会議利息	60,000 (570,000)
8. 前年度繰越金	1,000,000 (700,000)
計	14,690,000 (13,060,000)

支出の部

科 目	金額 (円) (前年度予算案, 円)
1. 事 業 費	
1.1 出 版 費	9,300,000 (9,000,000)
会誌等印刷費	7,700,000
編集費	900,000
発送費	700,000
1.2 行 事 費	270,000 (270,000)
1.3 名簿積立金	250,000 (0)
1.4 名簿作成費	0 (600,000)
1.5 会員業務委託費	1,450,000 (1,450,000)
1.6 会員業務郵税	170,000 (370,000)
事業費小計	11,440,000 (11,690,000)

2. 管理費

2.1 庶務費	200,000 (200,000)
2.2 会議費	200,000 (150,000)
2.3 通信費	30,000 (30,000)
2.4 旅 費	300,000 (400,000)
2.5 選 挙 費	0 (100,000)
2.6 雜 費	100,000 (100,000)
2.7 会誌保管料	171,600 (171,600)
管理費小計	1,001,600 (1,151,600)
3. 予 備 費	500,000 (0)
4. 基本財産充当引当金	500,000 (0)
5. 次年度繰越金	1,248,400 (218,400)
計	14,690,000 (13,060,000)

1986・1987年度 日本地球化学会役員選挙結果

選挙管理委員会	
投票総数 207 うち、有効投票総数 190	
無効投票総数 17	
(無効投票の大部分は、選挙管理委員会宛の封筒に氏名等が記入されていない投票でした。)	
会長 当174 増田彰正 次 2 一国雅巳	
副会長 当156 一国雅巳 次 22 杉村行勇	
監事 当 92 烏居鉄也 次 27 杉村行勇	
評議員 当153 酒井 均 当135 木越邦彦	
当134 松葉谷治 当129 松本英二	
当123 中井信之 当122 石渡良志	
当119 金森 悟 当119 杉崎隆一	
当118 松久幸敬 当111 水谷義彦	
当111 綿抜邦彦 当105 大隅多加志	
当105 川辺岩夫 当102 秋山雅彦	
当 97 佐藤和郎 当 95 兼岡一郎	
当 95 野崎義行 当 87 清水 洋	
当 84 梶原良道 当 84 坪田博行	
次 77 中山英一郎	
役員選挙細則第6条[II] (2) にもとづく追加選出当選者	
近畿ブロック 中山英一郎	
九州ブロック 鎌田政明	

名簿の訂正

①1985年9月に発行いたしました名簿に次の会員を掲載してありません。つしんでお詫びし、訂正します。

笠井加一郎 (KASAI, Kaichiro) 日本重化学工業(株)
地熱事業本部、盛岡工業所探査部化学課、〒020-01
岩手県岩手郡滝沢村鶴飼24笹森 (0196-84-4111)、自
宅住所、〒020-01岩手県岩手郡滝沢村鶴飼25下高柳
14-1 (0196-87-3444)

② 長尾 裕 (誤) → 長屋 裕 (正)
廣瀬文利 (誤) → 廣瀬文利 (正)

会員現況 (名簿作成時から1985年10月31日現在)

新会員

名譽会員 (正会員からの変更)

岩崎岩次
野口喜三雄
浜口 博
渡辺武男

賛助会員

株三啓社 〒110 台東区東上野1-7-8 (03
-833-6061)

正会員

池田保夫 (IKEDA, Yasuo) 北海道大学理学部鉱
物学教室 〒060 札幌市北区北10条西8丁目
(011-716-2111)、自宅 〒060 札幌市北区
北20条西2丁目19丸山方 (011-742-7851)
今村哲史 (IMAMURA, Tetsuhumi) 埼玉第一高等
学校

〒339 岩槻市大字徳力字西186 (0487-94-
4321)、自宅 〒330 大宮市土呂町2-25-7

弘陽ハウス205号 (0486-66-5852)

宇山央剛 (UYAMA, Fumitake) 出光興産(株)新燃
料部 〒292-01 千葉県君津郡袖ヶ浦町上泉
1280 (0438-75-2311)、自宅 〒292-01 千
葉県君津郡袖ヶ浦町上泉1218-2 (0438-75-
3471)

長尾誠也 (NAGAO, Seiya) 北海道大学水産学

部 〒041 函館市港町3-1-1 (0138-41-
0131)、自宅 〒041 函館市港町3-15-4 若

葉荘 (0138-45-3902)

成田尚央 (NARITA, Hisashi) 北海道大学水産学

部 〒041 函館市港町3-1-1 (0138-41-
0131)、自宅 〒041 函館市港町1-33-19

ハイツシーサイド (0138-42-0621)

原 宏 (HARA, Hiroshi) 国立公衆衛生院 〒

108 港区白金台4-6-1 (03-441-7111)、
自宅 〒184 小金井市本町1-14-20 (0423-
85-4820)

平井明夫 (HIRAI, Akio) 帝国石油(株)技術研究所

〒157 世田谷区北烏山9-23-30 (03-300-
5121)、自宅 〒360-01 熊谷市村岡1940-2

(03-325-8617)

島口たけみ (SHIMAGUCHI, Takemi) 山梨大学教
育学部化学 〒400 甲府市武田4-4-37
(0552-52-1111)

自宅 〒405 山梨市上神内川673 (05532-2
-9479)

杉野邦雄 (SUGINO, Kunio) 化学技術研究所分析
化学部 〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-
1, (0298-54-4620)、自宅 〒300 土浦市
烏山530-252

杉山雅人 (SUGIYAMA, Masahito) 京都大学化学
研究所 〒611 宇治市五ヶ庄 (0774-32-
3111)、自宅 〒607 京都市山科区西野山中臣
町26-100 (075-593-9334)

高田秀重 (TAKADA, Hideshige) 東京都立大学理
学部化学科 〒158 世田谷区深沢2-1-1
(03-717-0111)、自宅 〒176 練馬区北町
3-13-30 (03-933-5648)

高橋和也 (TAKAHASHI, Kazuya) 東京大学理学
部化学 〒113 文京区本郷7-3-1 (03-
812-2111)、自宅 〒161 新宿区上落合2-
21-9 落合学生ハイツ

滝上 豊 (TAKIGAMI, Yutaka) 東京大学宇宙線
研究所 〒188 田無市緑町3-2-1 (0424-
61-4131)、自宅 〒113 文京区西片2-13-
7 (03-812-6174)

竹中照雄 (TAKENAKA, Teruo) 出光興産(株)新燃
料部 〒292-01 千葉県君津郡袖ヶ浦町上泉
1280 (0438-75-2311)、自宅 〒292-01 千
葉県君津郡袖ヶ浦町上泉1218-2 (0438-75-
3471)

長尾誠也 (NAGAO, Seiya) 北海道大学水産学
部 〒041 函館市港町3-1-1 (0138-41-
0131)、自宅 〒041 函館市港町3-15-4 若
葉荘 (0138-45-3902)

成田尚央 (NARITA, Hisashi) 北海道大学水産学
部 〒041 函館市港町3-1-1 (0138-41-
0131)、自宅 〒041 函館市港町1-33-19
ハイツシーサイド (0138-42-0621)

原 宏 (HARA, Hiroshi) 国立公衆衛生院 〒

108 港区白金台4-6-1 (03-441-7111)、
自宅 〒184 小金井市本町1-14-20 (0423-
85-4820)

平井明夫 (HIRAI, Akio) 帝国石油(株)技術研究所

〒157 世田谷区北烏山9-23-30 (03-300-
5121)、自宅 〒360-01 熊谷市村岡1940-2

(0485-36-4830)

藤巻 稔 (FUJIMAKI, Minoru) フィニガン・マッ
ト・インスツルメンツ・インク 〒191 日野
市多摩平1-1 ファミユ京王 (0425-85-
1871)、自宅 八王子市泉町1911-131 (0426-
24-3782)

本多牧生 (HONDA, Makio) 北海道大学水産学部
〒041 函館市港町3-1-1 (0138-41-
0131)、自宅 〒049-01 北海道上磯郡上磯町
七重浜4-1-25 太陽マンション (0138-49-
0804)

本多照幸 (HONDA, Teruyuki) 武藏工業大学
原子力研究所 〒215 川崎市麻生区王禅寺971
(044-966-6131)、自宅 〒272 市川市市川
南1-3-16 (0473-25-2966)

三好登和子 (MIYOSHI, Towako) 東邦大学理学
部化学科 〒274 船橋市三山2-2-1 (0474-
72-1141)、自宅 〒284 四街道市千代田4-
18-10 (0434-23-3748)

山本正伸 (YAMAMOTO, Masanobu) 東北大学
理学部岩鉱教室 〒980 仙台市荒巻字青葉
(0222-22-1800)、自宅 〒980 仙台市柏木
2-6-31山下方

横田喜一郎 (YOKOTA, Kiichiro) 北海道大学水
産学部 〒041 函館市港町3-1-1 (0138-
41-0131)、自宅 〒041 函館市港町3-15-
4 若葉荘

和田雄高 (WADA, Yutaka) 北海道大学水産学部
自宅 〒041 函館市港町3-11-22 コーポ
ハルE号

更

岩熊真起 自宅住所 〒658 柏市あけぼの1-3-
20-801 (0471-44-6184)

川幡穂高 海外へ
C/O Prof. STEVEN D. SCOTT, Dept. Geology,
Univ. TORONTO, TORONTO, ONT M5S, 1A1,
CANADA

古賀昭人 勤務先 九州大学附属地熱開発センター
〒816 春日市春日公園6-1

佐藤博明 広島大学総合科学部自然環境研究室 〒
730 広島市中区東千田町1-1-89 (0802-
241-1221)、自宅 〒730 広島市中区加古町
2-14-401 (0802-243-0862)

茂野 博 海外へ
C/O Dr. ALFRED H. TRUESDELL, Branch of

Igneous and Geothermal Processes, U. S. Geolo-
gical Survey, 345 Middle field Road Menlo
Park, CA, 94025, U. S. A.

山本鋼志 勤務先 神戸大学理学部地球科学教室
〒657 神戸市灘区六甲台町1-1 (078-881-
1212)、自宅 〒658 神戸市灘区住吉宮町5-
10-9 (078-841-4710)

退会

隅本正顕、高橋 清、西川賢之、真木 強

香山 熱氏が逝去されました。つしんで御冥
福をお祈り申し上げます。

IUPAC個人会員入会のおすすめ

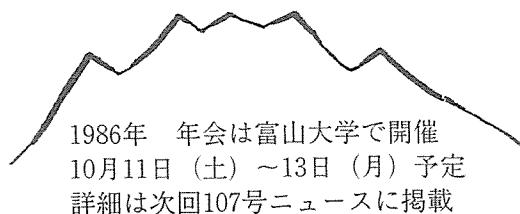
国際純正・応用化学連合 (International Union of
Pure and Applied Chemistry, IUPAC) には現在44ヶ国
が加盟しており、加盟国はそれぞれ代表機関 (わが国
では日本学術会議) を通して活動に参加しております。

IUPAC では、このたび世界各国の化学者が個人の
資格で IUPAC 活動に直接参画できる個人会員制度を
新たに設け、1986年から実施されることになりました。
これに伴い日本国内における IUPAC 個人会員に関する
事務を日本学術会議の依頼により日本化学会で取り
扱うことになりました。

IUPAC 個人会員の年間会費 (86) は4,000円 (IUPAC
会費7.50, Chem. Int'l 誌送6.00, 通信・印刷等事
務費2.50, 計16.00ドル) ですが、IUPAC Division,
Commissionへの参画、また機関誌 Chemistry Interna-
tional (年6冊) の配布、IUPAC 刊行物の25%割引購
入、IUPAC 主催の国際会議に10%割引で参加登録が
できるなどの直接的な特典がありますので、奮って
IUPAC 個人会員に入会されることをおすすめ致します。

IUPAC の目的、組織、活動、等の概要ならびに
IUPAC 個人会員制度についての説明 (Letter of In-
vitation from the Secretary General of IUPAC), およ
び同会員申込書ご希望の方は、下記宛て請求下さい。

IUPAC 個人会員入会申込書等請求先:
〒101 東京都千代田区神田駿河台1-5
日本化学会 会員部
〔電話 (03) 292-6160 直通〕



○催し案内

- 1) 28th International Geological Congress
Washington, D. C. July 9-19, 1989
International Geological Congress P. O. Box 1001
Herndon, Virginia 22070
- 2) XVI Pacific Science Congress
Seoul, Korea, August 20-30, 1987
Organizing Committee XVI Pacific Science Congress, K. P. O. Box 1008 Seoul 110, Korea, Tel. (02) 733-4478
- 3) 地図研大学講座・第Ⅳ期
第4回 2月15（土）17～19時
「二つの島弧論—日本列島の変動機構を求めて」 講師 鈴木尉元（工業技術院 地質調査所）
第5回 3月15日（土）17～19時
「野尻湖発掘と科学運動」
講師 小林忠夫（県立長岡大手高校）
会場：後藤学園（国鉄池袋駅下車徒歩7分）
資料代500円
問い合わせ先：地学団体研究会 〒171 豊島区南池袋1-8-7会津天宝ビル Tel. 03-983-3378

第4回チリ地質学学術大会 Proceedings の販売

"Proceedings of the IV Chilean Geological Congress held in Antofagasta, Chile, August 19 - 24 (1985); 132 papers and 2.800 pages of text on chilean and southamerican geology; spanish and english abstracts; price US\$70. + mailing costs. Sales and enquiries: Director Departamento de Geociencias; Univ. del Norte, Casilla (Box) 1280, Antofagasta, Chile".

地質調査所々蔵の地質標本

特に鉱物標本の利用について

地質調査所地質部 豊 遙秋

地質調査所では、創立以来100年余に亘って本所の歴代のスタッフによって採集され、研究された鉱物・岩石・化石を主とする地質標本を約30万点所蔵している。この中には地質調査所の主要な研究業務である地質調査や、資源調査の研究過程で記載されたものが多く、研究終了後、標本の管理に当っている地質部地質標本課に提出されたものである。この他に、交換・寄付・購入等によって入手されたものも多数含まれている。現在、提出された標本は鉱物・岩石・化石に3大別し、電算機による新しい管理・検索システム (GEMS: EDPS for GEological Museum Samples) の下に登録作業がすすめられ一連の登録番号をつけ収蔵庫の所定の位置に収納されるとともに、一部は地質標本館において展示、公開されている。

一方、地球科学の理論が発展し、実験手法や分析技術が近代化された今日、これらの地質標本の研究上の重要性が再認識されてきた。特に最近の鉱物学の進歩、発展は目覚しいものがあり、新しい見地からの研究が必要となってきており、様々な立場から鉱物標本の検討が行われている。鉱物学の関連分野では、例えば結晶成長の問題、精密結晶構造の解析、地球物理学や地球化学の立場からの検討や、比較研究に用いられるようになって鉱物標本が単に過去において記載されたという意味を有するものではなく、新しい研究の対象として欠くべからざるものとなっている。

このような研究上の目的から、本所では所内はもちろん、所外（海外も含む）の研究者に対して標本の利用を認め、ここ数年その利用件数は増加の傾向にある。

特に、鉱物学の分野以外の化学、物理学、医学、農学等の研究者からの無機物質としての研究素材として利用希望が多い。鉱物標本の利用の最も多い例は、標準標本又は対比標本としてあり、X線、中性子、電子顕微鏡、EPMA等分析用に用いられている。また、同位体や、微量元素の立場からの利用もある。

先に述べたように標本は大部分は本所の研究者によって研究、採集されたもので、現在研究中のもの、今後研究の予定のあるものなどが多く含まれているので、その利用に際しては、利用者と研究者との間で前以って十分に検討しておく必要があり、これらの調整は地質標本課が行っている。また、各種実験に用いる場合、多くは分解、破壊等の手法によって標本が返却されないため、利用に種々の制限が加えられることがあり、この場合の判断は地質標本課の担当者が行って

いる。

標本の利用者は、作成した実験試料と残余試料、写真、分析データ等が不用になった場合には返却すること、また、研究成果として結果を公表する場合には地質調査所登録標本を利用したこと旨明示し、登録番号もあわせて表示することが義務づけられている。（例 Diamond (GSJ M12345)）研究成果を印刷物とした場合には、印刷またはコピーを一部提出する必要がある。

標本の利用を希望する場合、利用者は「地質標本利用願」に下記の必要事項を記して地質部地質標本課に提出、担当者が検討の上、課長の承認を経て許可される。尚、所内の研究者が利用する場合も原則として同様の手続を経て利用している。

1. 研究機関名、所在地、電話番号
2. 氏名 [所属研究室、部課名等]
3. 利用の目的 (研究のテーマ)
4. 利用の形態 (利用後返却できる場合は、完全な形、大部分、一部分かを記し、返却予定時期を明記、返却できない場合はその理由)
5. 利用の手法 (実験方法)
6. 利用したい標本名 (申込者の註記があれば、標本の大きさ、量等を併記する)

宛先 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
工業技術院地質調査所
地質部地質標本課
(0298) 54-3752又は3754

地球化学会会員 900名を突破

本会の会員数は、ここ数年横ばいの状態でしたが、昨年ようやく900名を越えました。学会発表、会誌への投稿は会員である必要はありませんが、なるべく多くの人に支えられてこそ学会の運営は成り立つので、現会員は積極的に会員増強をすすめて下さい。昨年度から年会の際にも入会を受けつけるようにいたしました。また、学会事務センターおよび庶務幹事へお申し出下されば、申込用紙をお送りします。なお、入会の際には、推薦者の必要はありませんので、お気軽にお申し出下さい。庶務幹事 大隅多加志

〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学理学部化学教室
電話03-726-1111

猿橋勝子会員三宅賞を受賞

第13回三宅賞は猿橋勝子会員に授与されました。

これは同会員の永年にわたる「放射性元素ならびに親生元素の海洋化学的研究」の業績に対して与えられたものです。おめでとうございます。





地球化学会新役員のうちで、下記の実務担当が決まりました。会の運営と発展に微力を尽くす所存ですのでよろしく御協力をお願い致します。

会長 増田彰正

〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部化学教室
(03-812-2111)

副会長 一国雅巳

〒227 横浜市緑区長津田町4259
東京工業大学大学院総合理工学研究科
(045-922-1111)

庶務 大隅多加志

〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学理学部化学教室
(03-726-1111)

会計 清水 洋

(増田会長に同じ)

ニュース 松久幸敬

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所鉱床部 (0298-54-3636)

行事 野崎義行

〒164 東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所 (03-376-1251)

ニュース編集係より

○係の交代

封を切ってもらえるニュースから、くずかごへ直行しないニュースをめざして、少しづつ考えてきましたが、早2期4年が終りました。この間会員の皆様の御指導と寄稿に支えられ、何とか欠号を出さずにすみました。この106号は今までサボっていたというわけではありませんが、載せたかった記事も書いていただき、22ページになりました。読めるニュースとしては、ちょっと大き過ぎたと反省していますが、会の仕事が多かったことは会が活発な1つの証拠だと喜んでもいます。次回107号から松久幸敬評議員がニュースの編集を担当します。ニュース記事や御意見は松久さん(連絡先・電話はこのページ左欄)にお送り下さい。

このニュースは年3回(大体1月、5月、9月)発行されます。記事は横書きで、1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回107号は4月10日〆切、5月上旬発行の予定です。

編集者	田中 剛, 清水 洋 〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3 地質調査所 地球化学課 電話 0298 (54) 3558
発行所	日本地球化学会 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル(4F) 日本学会事務センター内 電話 東京03 (817) 5801 振込先銀行 三井銀行上野広小路支店 普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 107

1986. V. 6

1986年度年会は富山大学で開催

日時 10月11日(土)~13日(月)

会場 富山大学理学部

内容 一般講演、ポスターセッション、課題講演および特別講演

課題 環境における放射性および安定同位体の動態
コンビーナ 阪上正信、佐竹洋

懇親会 10月12日(日) 18時から富山大学学生会館大集会室にて、会費4,000円(学生3,000円)

エクスカーション 10月10日(金) 8:30~17:00

観光バスによる立山登山 費用6,000円
申込には所定の用紙を用いて近畿日本ツーリスト(株)富山営業所(〒930富山市桜町1-4-24 電話0764 (42) 4891 日本地球化学会年会担当 遠藤実)あてお申込み下さい。

講演申込締切 6月23日(月)必着

申込受付後、講演要旨用原稿用紙をお送りします。

講演要旨原稿締切 8月16日(土)

要旨集予約、懇親会、小集会申込締切 9月6日(土)

以上の申込には、必ず所定の用紙を用いて下さい。用紙がない場合には年会準備委員会宛にご請求下さい。なお、小集会を希望する方はハガキで別途お申込下さい。

要旨集代(3,500円)および懇親会費は9月6日までにご送金下さい。

申込先および連絡先

〒930富山市五福3190 富山大学理学部内

1986年度日本地球化学会年会準備委員会

委員長 水谷義彦

電話 0764(41)1271、内線 500, 679, 547
郵便振替 金沢0-19703

1986年度日本地球化学会年会

年会は日本地球化学会の主催、日本化学会の共催です。
富山での宿泊について

近畿日本ツーリスト(株)富山営業所でお世話をします。所定の申込用紙を用いて、同営業所あてお申込下さい。

地球化学会6月例会の御案内

下記のように例会を行いますので、会員多数の参加をお願い致します。

日時: 6月14日 14:00~15:30

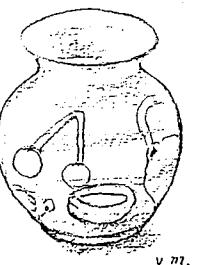
場所: 東京大学理学部化学教室、本館4階講義室

講師: 増田彰正(日本地球化学会会長)

題目: 希土類元素の地球化学: 新旧の話題

2月例会中止のお詫び

2月例会は会長講演の予定でしたが、日程の都合がつかず中止しました。ハガキ等による連絡を怠ったため、一部会員に御迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます(行事係)。



百の議論よりも一つの行動を

日本地球化学会会長 増田彰正

私は標題のように考えているので、長い文章を書くことにためらいを感じるが、新会長の考え方の傾向がある程度はっきりさせておくことも悪くないと思うので、筆をとることにした。以下、やや放談的かつメモ風に書かせていただきます。

▼日本地球化学会は中小企業のようなものです。多くの中小企業が、いつかは大企業の仲間入りをしたいと夢見ているように、私も日本地球化学会が大企業の下くらいになる日を夢見たい。それには、大企業の経営から学ぶことは少なく、中小企業のやり方から学ぶことが多いに違いない。

▼誰しも自分の属する学問分野の将来を考え、できれば、その発展を願う。(そのような発想自体を根本から厳しく自省すべし、という論もあるが……)とにかく、私も地球化学の将来に思いを寄せ、その発展を強く願っている。わが国の地球化学は、他の関連分野に比して、極めてバランスを失して弱体であるようだ。これは、周辺の関連分野にとっても望ましいことではない。

何がこのようにさせたのか?これについては省略する。とにかく、若干の重要な点で日本の地球化学は悪い循環に陥っているのではないだろうか。悪循環を好循環に転ずることは、いうほど容易ではないが、出来ることから一つずつ実行するしかない。何れにせよ、地球化学の強化伸展の方策は、多様なものでなければならぬし、広い柔軟な構想と視点を背景に持つものでなければならぬ。そして、一方では、大胆な発想と行動を、また一方では、息の長い努力を要する仕事である。そして、あまり悲観的にならぬこと。

▼まず正論を云えば、われわれはいい仕事と研究をしなければならない。いい成果を上げることによって地球化学の重要性を理解してもらえるからである。人類の自然観の深化に根源的に寄与する純学術的研究でもいいし、人類(あるいは日本人)の今日明日、あるいは、千年あるいは十万年後の生存に役立つような研究でもよい。いい成果をあげるには、いい人材を集めることも重要な一つの要件である。

▼私は産学官協同について、基本的に積極的賛成の意見を持っている。地球化学が積極的に参加し大いに寄与できるテーマを自ら探すと共に、参加を求められれば進んで応すべきである。それは、地球化学の発展につながり得る一つの大きな可能性を持つからである。無論、そのような協同の望ましい形態についての議論もなされてよい。このことに関連していえば、地

球化学の実学的側面の強化も大いに考えるべき問題である。

▼学問は、本来的には個人の知的乃至肉体的労働の産物である。しかし、各個人の生活費や研究費は天から何となく降って来るものではない。研究費、講座や学科の新增設、研究施設の設置等すべて行政側の決定に属する(私学や民間の研究機関とて、国の行政とその方針に無縁ではない)。学術行政機関は、学術行政の方針として特定のある分野の振興を打出すこともでき、まれには、その逆もあり得る。少なくとも35才を越えた研究者は、学術全体の極めて重要な枠組を時には決定的に左右する学術行政の機構とその役割についてある程度の関心を持つべきである。私の個人的印象であるが、日本地球化学会会員のこの面への平均的関心度はかなり低い部類に属するのではあるまい。それは、日本の地球化学と学術行政(あるいはそれに大きなインフルエンスを持つ学者)との距離を物語るものであろう。私はこの距離がなるべく早く縮まることを望んでいる。

▼ある会で、その大学の化学の名誉教授の先生がサッチャー首相のことを持ち出して、君達の中から首相が出てもいい、と話された時、その先生がおよそ政治的でない方だっただけに意外であった。すべての面で政治の力は大きい。(こんな非常に短絡的なことを書くとお叱りを受けるかもしれないが)、もしも仮に、地球化学を純粹に大切と考える人が国会議員(しかも与党? ! 与野党を問わず?)の中に現れたら、地球化学を取巻く事態が一変することも起り得るかもしれない。

▼会長になったからといって、急に何かができるわけでもなく、私は非力であることを告白せざるを得ない。しかし、何か少しでも本学会にとってプラスになりそうで、かつ、実行可能なものがあれば、まずそれから実現させたい。

現時点で一つ考えていることは、比較的バラエティを持たせた賞を設けることである。多様な本学会の会員に、本会を身近に、かつ大切に考えていただけるような賞にしたいと考えている。また、本会の活性化に少しでも役に立つて欲しいと考えている。しかし、同時に、本会の財政的負担にならないよう配慮したい。

▼学会の収入がもし年に100万円増加し、これをいわゆる経常経費でなく、地球化学の活性化を意図した経費に向けることが出来れば、かなりの成果が期待できよう。会員の知恵と努力で、会費の値上げに頼らずにそれを実現することは不可能ではないと思う。

▼地球化学の発展のために、学会として力を発揮で

きることと、各個人の力と行動に専ら依存することとがあろう。無論、組織と個人の連係がうまく機能することが望ましい問題もある。また、組織と個人の相互作用は、問題と場合により各様であろう。地球化学のPRもこの種の問題であり、個人の努力と才に大いに期待したい問題であると同時に、組織としても考えるべき問題であろう。

▼これは全くの蛇足であるが、私はかねてから地球化学科の設置を唱導し、ささやかながら10年以上努力して来たことをここに記しておきたい。これに対する批判論もよく承知しており、また、その実現の困難さも十分認識しているが、これからもそのささやかな運動を続けてみたいと考えている。

〔追記〕先日、幹事会の折、私が企画室のようなものを作ったらどうかという考えを出しました。幹事会のメンバーの意見は、「それは、あなたが個人的に作ったほうがよい。もしも、そこから、学会にはかる必要があるものが出て来たら、その時に会にはかればよいのではないか。」ということでしたので、それに従うことにしました。もしも、会員の中で(非会員でもよい)、上記のいわば個人的な企画室のようなものに積極的に参加して、私にアイデアあるいは労力を提供してもよいという奇特な方がおられましたら増田まで御一報下さい。なお、私と波長がひどく合わない方は困りますので、前記の私のメモ風の放談を是非参考にして下さい。



会員からの手紙

GJをよくするために一投稿者の視点に立って

北海道大学水産学部 角皆静男

最近、GJ誌ではないが、ある国内誌に投稿した論文が却下された。却下理由に同意できなかったので、多少修正してEPSL誌に再投稿した。そのコメントは好意的(具体的には、二層モデルを三層モデルにしたらという1点だけ)で、一回修正してパスした。却下の理由は、用いた数値や仮定が不確かで、結論があいまいだからというのである。

私が国内誌に投稿してほぼ必ずいわれることは、「仮定に根拠がない」である。根拠があれば、仮定は不要だろう。私は、事実か、引用か、仮定かの区別をはっきりさせ、得られた結論がどのような仮定(あるいはモデル)に基いたか忘れないこと、そして、審査員の役割は、その仮定が成り立つか否かを過去の事実からチェックし、不成立の場合に修正または却下を要求することだと思っている。

日本の化学者による地球化学の論文は、データ報告が中心で、議論がなく、どんな現象を明らかにしようとしているかわからないとよくいわれる。私は、地球化学において一次的データは重要であり、それを得ることに徹する研究者がいてもよいと思う。しかし、その研究者が審査員になった時、自分の研究態度を押しつけてくる点に問題を感じる。

第2に、日本の審査員は滅多にほめないばかりか、ケチをつけることが審査だと錯覚しているのではないかとさえ私は見える。果物屋は店先のリンゴを磨き上げて売る。この商人感覚を学会誌も見習い、こうしたらおもしろくなるという視点から審査すべきと思う。ケチをつけ、多少不確かなおもしろい議論はすべて削られ、ちょうど「目黒の殿様のサンマ」のように味も素気もない論文にして、印刷したという記録だけ残すのは、もったいない話である。

英語については、私も一向に上達しない。外国誌に投稿したとき、直される程度は、今も20年前も同程度である。しかし、今の私に対する国内誌の英語に関するコメントは、20年前の私や若い投稿者へのものよりもずっと少ない。私には若く、有名でない研究者への「いじめ」の道具として英語を使っている面があるように思えてならない。問題が英語だけの場合は、金銭的に解決する方策を立てるべきだろう。今や欧米に追いつけという先輩達の時代ではない。科学に対する実力が同程度なのに、言葉の問題で低く評価されたり、それ

にあまりに多くの時間を割くことはなくしたいものである。

#

「核エネルギー」と「偏西風」の科学精神

愛媛大学理学部 川辺岩夫

原子爆弾と風船爆弾、いずれも前大戦末期に登場した当時の新型爆弾である。周知の通り、前者は核エネルギーを利用する最初の兵器として、米国のマンハッタン計画によってつくられた。そして後者は、日本陸軍の「ふ号」作戦によって、日本上空の強い偏西風を利用して米国本土を直接爆撃しようとする気球兵器として開発された。この気球兵器開発のヒントは実は、日本からのジェット気流によって攻撃される可能性を危惧した米国気象学者の学会講演から得られたものであると聞く。しかし、両交戦国においてかくも異質な新型兵器がほぼ同時につくられていることに、ある種の感概を覚えるのは筆者だけであろうか？そしてこのことは、両国の兵器技術水準の問題のみならず、その背後にある科学精神の対照性に関係していると考えるのもやはり、筆者だけの飛躍した考えであろうか？核エネルギーと偏西風、この二つは今日においても両極の科学を象徴しているように思える。そして、自らの心の内にあって時として相対立する二つの心にもつながっているように感じる。

近代科学の精神的源流は、自然の中に合理的秩序が存在することをあくまで確信し、これを執拗に客体化しようとするユダヤ-キリスト教的自然観に求められること。そして、この自然観は、自然を伴侶とし、自然の中に没入し、自然と一体となろうとする日本の伝統的自然観とは著しく異っていること。そしてさらに、かかる伝統的自然観が支配する我国に移植され育てられ現在に至っている我々の科学は、幾つかの深刻な問題を内包せざるを得ないこと。これらを明確に指摘したのは科学史家渡辺正雄（1976）であったと思う。

日本の地球化学が、「即興的」自然たる地球に興味を覚える化学者の側から興されたのは、このような日本の伝統的自然観と西洋科学の自然観の相克と和解の歴史的所産の一つではなかったか？

筆者らの団塊の世代は、日本の伝統的自然観が急速に忘れ去られつつあった時代に学校教育をうけることになった。しかし、「花鳥風月」の観念をある程度教えてくれる自然は、少なくとも筆者の身のまわりにはまだ存在していたし、大学教育をうける時代は「科学」が問い合わせられた時代でもあった。現在はどうであろうか？現在の若者からすれば、「日本における科学精神

の二重性……」などと口走る筆者の如き人間は、ネクラ人間とレッテルをはつてしまいたくなる存在にすぎないのかも知れない。しかし、もし「地球」と「化学」が東西の伝統的自然観をそれぞれ表象する言葉であるとするならば、「地球化学」とは、どのような自然観を表現する言葉なのだろうか？現代の若者にも答えてほしいと思う。

#

日本地球化学会の発展を願う

東京都立大学理学部 小椋和子

学会の会計および庶務の仕事を各々2年続けて担当し、ようやく解放された今、やれることはやったとほっとしているところです。ただ会員の方からみると不満を感じることが多々あったと思われます。至らぬ点はお許し下さい。

当学会は規模が小さい割合には年に8冊の学術誌および3号のニュースの発行、年会、例会（年2回）、幹事会および評議員会（年3-4回）の開催等多くの活動を行っていますし、また学術的な色彩が濃いので企業の援助も少なく、財政上の基盤が活動に見合っていないのが悩みの種です。財政を安定させるためには会員数を増加させることができます。このことは選挙の方法が学会単位になった学術会議との関連においても重要です。残念ながら今のままでは大幅な会員の自然増は見込めそうにはないので、今後の選択として第一には高額の会費で小規模にまとまるか（分裂の可能性がある）、第二の選択として自然の化学（環境としての地球）を研究している人および実践者を大勢取込むこと以外にござめないと思います。

当学会では学術誌への投稿も年会の発表も非会員を受け入れるといった寛容な学会なので、とくに年会では非会員と会員がほぼ同数（全会員数の20%）の時があり、学会の姿勢次第で会員を増やすことは可能です。これから学会の方向を探る上でも非会員で年会に参加したり、学術誌に投稿している人達を勧誘したり、意見を聞いたりする努力が必要なのではないかと思います。勿論、最も大切なのは地球化学の研究者のポストを増やすことなのですが。

なお、この4年間は担当幹事としてかなりの時間を学会の仕事に費やしました。また、遠方の評議員の方は多額の旅費を負担されています。掛け値なしの正直な気持ちとして言いたいのです。学会に奉仕している人に対してはくれぐれも「好きでやっている」といった冷たい評価でなく、批判する所は批判としてはつき

り表明し、一方では感謝の気持ちで接して頂きたい。それが学会の発展に通ずる道であると信じています。

#

放射性廃棄物の地層処分における地球化学の役割

日本原子力研究所 中嶋 悟

原子炉等から出て来る放射性廃棄物を地層内に処分する事を想定した安全評価の為の研究が世界各国で進められている事は皆さん御承知の事と思います。この問題には様々な科学・技術が関わっていますが、その中でも放射性核種の長期間における地層内での挙動についての予測は、最も難しく且つ重要な問題の一つです。この問題は、取り扱う元素が特殊ですが、その多くが地球化学の対象となるものです。問題となる核種（主にCs, Sr, Co, I, Tc, Pu, Np, Am, Cm等）の、廃棄物固化体（ホウケイ酸ガラスや合成鉱物）からの浸出、地層中の移動、鉱物や有機物・生物による固定の如き地球化学的挙動に関する様々なデータが要求されています。これらについて、その機構の解明と定量化の努力がなされていますが、より多くの基礎的なデータの蓄積が望まれます。以下にそのうちいくつかの例を挙げます。

- ①上記の元素又は類似元素の溶液化学：pH-Eh 安定領域図、溶解度、加水分解、錯体形成、コロイド生成、その他の熱化学データ。
- ②ガラスの変質の機構とカイネティックス：ガラス表面に生成する非晶質物質の性質、その鉱物化の速度、元素の浸出の律速過程、元素の各相への分配。
- ③岩石-水相互作用（特に常温～200°C）：変質鉱物の結晶化・成長速度、水流速のある場合の研究。
- ④岩石中の割れ目・粒界：これらの存在状態とそれを充填するもの、間隙率、透水性。
- ⑤水酸化鉄、シリカ等非晶質物質による元素の固定。
- ⑥地層中での酸化・還元反応：特に、2価の鉄を含む鉱物や有機物の還元剤としての役割、その定量化。
- ⑦元素の運搬・固定に有効な有機物：その機構と定量化、炭質物、腐食質、ポルフィリン、バクテリア、各種生物。

これらの多くは、地球化学会会員諸氏の興味と一致すると思われますので、御協力をお願いします。

連絡先：〒319-11茨城県東海村

日本原子力研究所・環境安全研究部 中嶋 悟

電話：(0292) 82-6156

会員からの投書欄「会員からの手紙」を設けました。投書をいただく内容は、学会の運営に関する意見、質

問、感想、地球化学の研究に関することで発言したいこと、あるいは研究活動をとりまく環境や世相についての感想や意見、といったことがらです。この欄が、会員の自由な討論の場となって、会の活動の活発化につながることを願っています。

なお、原稿の長さは1,000字以内（刷上り約半ページ）を目安にして下さい。用紙は何でもかまいませんが1行24字で書いていただくと助かります。原稿用紙をご希望の方は係までお申し出下さい。ニュース発行のスケジュールは1月、5月、9月で、原稿の締切はそれぞれの約1ヶ月前です。原稿の送り先は、〒305茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3工業技術院地質調査所鉱床部 松久幸敬（電話0298-54-3636直通）宛です。皆様からの投稿をお待ちしています（ニュース編集係）。



○本田奨励金派遣候補者決まる

第6回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議（英國 Cambridge, 1986年6月30日～7月4日）に出席する若手研究者の渡航費援助を目的とした本田奨励金の選考会が、去る3月13日から15日、箱根で開かれた質量分析学会同位体比部会研究会の席を借りて行なわれ、21名の応募者のうちから、下記の11名の派遣候補者と2名の補欠を選んだ。派遣研究者は、国際会議のプログラム決定後に最終決定される。なお、本田奨励金による若手研究者の渡航費援助は、4年後の第7回同国際会議に際しても同様の主旨で行われる予定である。

派遣候補者（11名、アイウエオ順）
甘利幸子、岡野 修、風早康平、佐野有司、田中 剛、中井俊一、長尾敬介、T. M. プラダナンガ、松田准一、吉田尚弘、和田秀樹

補欠（2名）
野津憲治、森下祐一

第13期活動計画決まる

昭和60年10月 広報委員会

日本学術会議法の改正によって、従来の科学者による直接選挙によるものから、学術研究団体（学協会）を基礎とする「推薦制」となった新しい会員選出制度の下に選ばれた「第13期日本学術会議」は、去る7月22日発足しました。そして、このたび開かれた第99回総会（10月23日～25日）において、第13期における活動の基本的立場と具体的な課題を明らかにした「第13期活動計画」を決定するとともに、実際の活動の舞台となる常置・特別委員会の設置を決定しました。その概要は、次のとおりです。

第13期日本学術会議は、「第13期活動計画」に盛られた課題の具体化に当っては、今後とも学協会と密接な連携を保ち、逐次お知らせしていく考えでありますので、広く多くの科学者の御理解を賜るようお願いいたします。

活動計画

戦後40年、我が国における科学・技術は目覚しい発展をとげ、経済の高度成長とともに、国民生活の向上に多大の貢献をしてきた。しかしながら、近年経済・社会環境の激しい変化を背景に、様々な問題が科学・技術のあり方のうえに生じている。その中には、科学と人間との係わり方の根源を問う直すようなものも含まれている。また、国際社会における我が国地位の向上も加わって、科学の面における我が国への貢献への期待は国際的に強まっている。

日本学術会議は、創設以来、学術研究団体や科学者との連携のもとに、その目的・職務の遂行に努力し、我が国の学術研究体制の整備についての重要な勧告等を行い、研究所の設立などを含めて数々の業績をあげてきた。また、国際協力事業への参加をはじめとして世界の学界と提携しつつ、科学の進展に貢献してきた。しかしながら、創設後36年余を経た現在、科学を取り巻く情勢は、国際的にも国内的にも著しい状況の変化を生じた。学術研究団体を基礎とする新しい会員選出制度のもとに発足した第13期日本学術会議は、本会議の創設以来の基本的精神を堅持しながら、改むべきは改め、一層の成果をあげるべく努力するものである。

日本学術会議は、総合的な科学政策に関する重要事項を自主的に調査・審議し、その実現をはかる機関としての使命と役割を確認したうえで、会員の科学的知見を結集し、時代の要請に即応しつつ将来を見通した基本的理念を確立し、我が国における学術研究の一層の推進をはかるために、本会議の本来の目的を、次の視点から実現することが必要であると認識した。

人文・社会および自然科学を網羅した日本学術会議は、全学問的視野に立ち、学術研究団体を基盤とする科学者の代表機関であることを認識して、全科学者の参加と意見の集約を真摯にはからなければならない。さらに、本会議が集約した科学者の意見が政策に反映するよう、他の学術関係諸機関と協議のうえ、その役割分担を明確にしつつ、これらとの連携の強化をはかる必要がある。

また、学術研究団体を基盤とする日本学術会議は、このたび法制化された研究連絡委員会の重要性を認識しその活動を強化するとともに、学術研究団体の活動を助長し、研究基盤の強化をはかり、高度化する科学の発展に貢献する必要がある。

我が国の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議は、国際社会における我が国地位の向上と海外諸国との期待に応えて、学術の分野における国際協力を飛躍的に拡大する必要がある。

日本学術会議は、真理を探求するという理念に立脚し、科学の将来への展望をひらいていくため、科学の開かれたあり方と国際性を重視し、学問・思想の自由の尊重と研究の創意への十分な配慮のもとに、長期的かつ大所・高所の視点に立

ち、創造性豊かな研究を発展させることが必要である。

日本学術会議は、以上の諸点を踏まえ、科学者の総意を代表して科学の精神を高揚し、21世紀に向けて望ましい科学のあり方を検討して、総合的な科学政策に指針を与えることにより、国民の期待に応えるとともに人類の福祉と平和に貢献することを期するものである。

1 重点目標

第13期活動計画の重点目標は、次のとおりとする。

(1) 人類の福祉・平和および自然との係わりにおける科学の振興

科学・技術の著しい発展は、人間生活を豊かにすると同時に、現代社会の高度の複雑化とあいまって、人間社会に新たな緊張をもたらし、人類の福祉・平和および自然環境を脅かすのではないかとの疑念を招いている。人類の福祉・平和および自然との係わりを十分に考慮しつつ、科学の総合的振興をはかることは、21世紀に向けて極めて重要な課題である。これは、人文・社会および自然科学を網羅した本会議の特長を十分に発揮してこそ可能となるものである。科学の振興・発展の人間・社会への望ましい貢献および自然界への好ましくない影響の防止への具体的構想を樹立し、あわせてこれに対応する社会の体制整備に明確な指針を提示する。

なおまた、今日の社会的現実が提起している複雑な問題を解決するには、既成の個別の学問領域のみでは十分に対応し得ない。多くの学問領域が、その独自性を保ちつつ、共同の努力を行い、学問の内容・体系の変革にまで進むことによって、総合的な研究のあり方を追求することが必要である。人間性の尊重を基礎とした科学の発展のための条件整備、学際・複合領域および総合的学問研究の的確な方向づけ等を明らかにすることは必須条件である。

(2) 創造性豊かな基礎的研究の推進と諸科学の整合的発展

科学・技術の発展には、基礎的研究の推進が不可欠であることは言をまたない。我が国科学の国際的地位の確立をめざし、その発展に向けた長期展望・指針・将来計画の策定についての基盤となる創造的な基礎的研究の推進に積極的に取り組む必要がある。

また、学術の領域は広範多岐であり、それぞれの領域ごとに方法論も異なり研究者の求めるものに大きな違いがあることに思いをいたし、それぞれの研究者の声を開き、それぞれに適した育成策を講ずることにより諸科学の整合的発展をはかる必要がある。

まず、創造性の基礎となる個人の着想を重視し、革新的研究の強化等を積極的にはかる。一方においては、学術研究体制や社会・産業構造等に内在する創造性をはばむ負の要因の解消に向けて建設的提言を行うなど基礎的研究推進のための条件整備のあり方について、根本的検討を加える。

とりわけ、他の先進諸国に比較して我が国学術情報・

資料の整備は著しく不備である。創造的な学術を振興するための基盤整備の一環として、絶えず我が国学術情報・資料の全般にわたる状況を把握し、その蓄積・処理・利用の方策を審議、提言していくことが必要である。

(3) 学術研究の国際性の重視と国際的視野の確立

我が国学術研究の国際交流・協力のあり方について、これまで本会議が築いてきた実績の評価を踏まえつつ根本的検討を加える。さらに、相互理解と互恵を基礎とした発展途上国に対する共同研究の推進、技術協力・技術移転・共同開発のあり方等を検討する。このようにして、先進国・発展途上国双方との国際交流・協力の基本姿勢およびその抜本的充実方策を明らかにする。

また、科学・技術の急速な発達に伴って重大な影響を受ける国際的な政治・経済・社会関係を諸科学の学際的研究によって分析し、そこで生じた諸問題についての解決の方策を究明する。

そのためには、学術研究の国際性を重視して、その国際交流の諸条件を整備し、全世界の科学者と協力して科学の望ましい発展に貢献するための努力を払っていくことが必要である。

課題

上述の重点目標にのっとり、現下の最重要課題に対応し、第13期中に、報告・提言等の形での成果を得べき課題を選定する。

これらの課題については、研究連絡委員会の協力を求め多数の学術研究団体と密接な連携を保ちつつ、広く英知を結集して総合的に審議し、適切な報告・提言等を行うものである。

なお、これらの課題の審議に当っては、必要に応じ中間報告又はその他の形で随時報告を行うものとする。

(1) 人類の福祉・平和および自然との係わりにおける科学の振興

この課題の重要性については、既に述べたとおりであるが、本課題については直接に関係する学問だけではなく広く諸科学が積極的に関与すべきであることを十分に考慮し、その方法と課題を検討する。当面、次のサブテーマ等についての問題点および今後の展望をはかろうとするものである。

<サブテーマ>

- ① 人類の福祉・平和および科学
- ② 科学者の倫理と社会的責任
- ③ 医療技術と人間の生命
- ④ 生命科学と生命工学
- ⑤ 高齢化社会
- ⑥ 生物資源・食糧と環境
- ⑦ 資源・エネルギーと文化・経済・環境
- ⑧ 高度情報社会
- ⑨ 平和研究機関

(2) 創造性豊かな基礎的研究の推進と諸科学の整合的発展

本課題は、日本学術会議が恒常的に取り組むべき課題であるので科学者の創造性を最大限に發揮するため、研究の自由を保障し、科学者の地位を高めるための努力をするとともに、創造性に富んだ研究者の養成、研究基盤の強化と研究の活性化、我が国研究費のあり方、創造的研究醸成のために必要な条件整備の課題等について問題点を明らかにし、積極的提言等を行うものである。

<サブテーマ>

- ① 研究者の養成
- ② 研究基盤の強化と研究の活性化
- ③ 学術動向の総合的分析と長期研究計画の検討
- ④ 研究費のあり方

(3) 学術研究の国際性の重視と国際的視野の確立

我が国学術の国際的地位の向上に伴い、学術研究の面におい

ても我が国に対する国際社会からの期待が増大してきている。世界の科学者と提携して人類の平和と福祉を促進するよう努力するとともに、特に発展途上国に対する学術的な協力の方策について検討を行うものである。

<サブテーマ>

- ① 学術研究の国際交流・協力のあり方
- ② 国際協力研究事業
- ③ 国際的な学術研究機構のあり方
- ④ 技術協力・技術移転・共同開発問題
- ⑤ 国際関係問題

3 第13期日本学術会議の具体的活動の重点

各委員会の審議を通じて、あるいは個別に日本学術会議の業務を円滑にするため、下記の具体的活動を重点的に行う。

- (1) 国際交流・協力事業の拡充を行う。
- (2) 研究連絡委員会の見直し、活動の活発化をはかる。
- (3) 重点目標について、諸科学の協力のもとに整合性のとれた審議の促進をはかり、その成果を講演会・シンポジウムの開催等により広く一般に公表する。
- (4) 重要にして緊急性のある勧告等を建設的に行う。
- (5) 広報活動の充実をはかるなど学術研究団体との連携強化に努める。

4 委員会

常置・臨時（特別）の委員会は、現会員の意見を反映させ前期の申し送り事項をも踏まえて次の基本方針に基づいて設置する。

- (1) 常置委員会設置の基本方針

目的・任務に即して日本学術会議として恒常的に調査・審議を進めていく必要がある事項について、個々の委員会の職務を明確にしたうえで設置する。
- (2) 特別委員会設置の基本方針

重点目標、課題に即して、長期的展望を踏まえて今任期中に調査・審議の結果、勧告・要望・諮詢答申として取りまとめることが望ましい事項について設置する。

常置委員会

第1常置委員会——研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織等に関すること。

第2常置委員会——学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

第3常置委員会——学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

第4常置委員会——創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

第5常置委員会——学術情報・資料に関すること。

第6常置委員会——国際学術交流・協力に関すること。

特別委員会

医療技術と人間の生命 資源・エネルギーと文化・経済・環境
生命科学と生命工学 高度情報社会
高齢化社会 國際的学術研究機構
生物資源・食糧と環境 國際協力事業

多数の学協会の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。
なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会
(日本学術会議事務局庶務課)
電話 03(403)6291

○岡山大学地球内部研究センター共同利用の公募

同センターでは、地球内部を構成する物質の本質、起源、反応および運動に関連する研究の発展に資るために、全国の地球科学研究者を対象とした下記の共同利用研究制度が設けられています。これら研究員等の公募は、毎年前期と後期の2期に分けられ、前期分の公募は2月頃に、後期分の公募は8月頃に行なわれます。

(1) 公募事項

- (a) 客員部門 教授1名、助教授1名。任用または併任の期間は6ヶ月以内。
- (b) 共同利用研究員 若干名。
- (c) 短期研究会 1件程度。比較的少人数の研究者による原則として2日以内の研究会。

(2) 申込資格

国・公・私立大学および国・公立研究所の教官・教員・研究官ならびにこれに準ずる研究者。

(3) 申込方法

所定の応募・申請書を一通提出のこと。なお、客員部門教授・助教授については必ず所属長を経由のうえ申し込むこと。

(4) 採否

客員部門教授・助教授および共同利用研究員の選考ならびに所要経費等は、地球内部研究センター運営委員会において審議し、協議員会で決定する。

申込期限・共同利用業務等の照会、申請用紙の請求、および共同利用の申込は下記宛にしてください。

鳥取県東伯郡三朝町山田827 (〒682-02)
岡山大学地球内部研究センター共同利用係
電話 0858-43-1215 内線513

○1986年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および研究助成金候補者の推薦依頼

地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に毎年贈呈されている三宅賞の受賞候補者、および地球化学の若手研究者で海外シンポジウムに出席し、論文を発表する者に対する研究助成金の受領候補者の推薦依頼がありました。

研究助成金は1件10万円で年に3件、〆切日において満35才までの研究者を対象とします。申込〆切日は三宅賞は1986年9月5日(金)、研究助成金は、第1回〆切1986年9月5日(金)、第2回〆切1987年1月末日です。詳細は地球化学研究協会(〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217、電話03-330-2455)へ

おたずね下さい。

○1987年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」候補者の推薦依頼

猿橋賞の受賞候補者推薦の依頼がありました。本賞は自然科学の分野で顕著な業績をおさめた女性科学者(推薦〆切日50才未満)に贈呈されます。推薦〆切日は1986年11月末日(到着)です。詳細は、女性科学者に明るい未来をの会(〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217、電話03-330-2455)へおたずね下さい。

○トヨタ財団1986年度研究助成の公募

トヨタ財団から、交通安全、生活・自然環境、社会福祉、教育・文化の諸領域を対象にした研究助成の公募の案内がきています。本年度は、これらの課題を中心、「新しい人間社会の探究」を基本テーマとして下記の要領で研究助成を行います。

(1) 研究種別と助成の概要

(a) 個人奨励研究(第Ⅰ種研究)

若手研究者による萌芽的な個人研究。1件当たり助成額は概ね50~200万円で約25件。助成期間は1986年11月1日より1年間。

(b) 予備的研究(第Ⅱ種研究)

学際的・国際的・職際的な総合研究のための準備研究(共同研究に限る)。1件当たり助成額は概ね100~300万円で約25件。助成期間は(a)と同じ。

(c) 総合研究(第Ⅲ種研究)

第Ⅱ種からの展開、第Ⅲ種研究の継続、フォーラム助成による特別研究(共同研究に限る)。1件当たり助成額は概ね200~2,000万円で約15件。助成期間は1986年11月1日より1年間または2年間。

(2) 応募方法

財団事務局に申請用紙を請求し、必要事項を日本語で記入の上、1986年5月31日(土)(当日消印有効)までに当事務局宛書留で申込んで下さい。なお、申請用紙の請求には、1部240円、2~3部350円、4~8部700円の郵送料金分の切手を同封して下さい。

(3) 申請用紙申込・応募先

〒163 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル37階 私書箱236号(財)トヨタ財団 研究助成係、電話03-344-1701

1985年度第4回日本地球化学会新旧合同評議員会

議事録

日時： 1985年12月21日 17時~21時

場所： 赤門学士会館

出席者： 松尾禎士会長、○増田彰正副会長、*秋山雅彦、*石渡良志、○一國雅己、*大隅多加志、小椋和子、小倉紀雄、*梶原良道、*金森悟、*兼岡一郎、*鎌田政明、北野康、*佐藤和郎、*清水洋、鈴木款、田中剛、*坪田博行、東野徳夫、*中井信之、*野崎義行、野津憲治、*松本英二、*松葉谷治、*松久幸敬、*水谷義彦、*綿抜邦彦 各評議員

(○新会長、○新副会長、*新評議員)

I. 前回の議事録を一部訂正のうえ承認した。

II. 報告事項

1. 庶務

(小椋評議員)

*会長から名誉会員記を岩崎岩次、野口喜三雄、渡辺武男、各名誉会員に、お届けした。

*香山勲会員の訃報に接し、会長名で弔電を打った。

*引き継ぎ事項について説明。

2. 行事

(東野評議員)

*1985年度年会は10月17日~19日に開催された。講演数236件、参加者、会員284人、非会員121人、また、このおりに入会申し込みが6名あった。

*年会決算の結果、20万円の本会からの援助金を返却、また197,316円の剩余金が生じた。

(松久評議員)

*今後の例会・年会の持ちかたについての試案を引き継ぎ事項として説明。

3. 編集・ニュース

(一國評議員)

*G. J. Vol. 19 (5) 明年早々に、(6)は1月下旬に発行の予定。

(小倉評議員)

*「地球化学」19巻1/2号合併号を発行した。

(田中評議員)

*ニュース106号は、原稿締め切り1月10日、内容は新名誉会員の紹介・将来計画委員会報告など。

4. 日本学術会議

(増田副会長)

*本日、地球化学宇宙化学研究連絡委員会が開催された。席上委員長に本田雅健氏を選出した。幹事は、

野沢・武田・大島・増田の4氏

*IGBP (International Geosphere Biosphere Project)
への対応準備が始まった。

(松久評議員)

*11月25日鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会に出席した。

(小倉評議員)

*11月9日陸水研究連絡委員会に出席した。1989年のIAHSの日本でのAssemblyは中止となった。

5. 役員選挙細則改正検討委員会

*新評議員会への引き継ぎ事項として、野津評議員から検討結果の説明があった。

III. 議事

1. 入退会(小椋評議員)

*入会 11名：雁沢好博・藤巻稔・今村哲士・杉野邦雄・平井明夫・山本正伸・宇山史剛・竹中照雄・御幸和則・島口たけみ・杉山雅人

*退会 2名：高橋清・真木強

以上を承認。会員現況は、

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年8月31日	889	13	3	905
入会	11	0	0	11
変更	-4			+4 0
退会	2	0	0	2
1985年10月31日	894	13	7	914

2. 旧評議員退席のち引き続き新評議員会

*増田会長より、編集：一國、庶務：大隅、会計：清水、行事：野崎、ニュース：松久の担当を幹事会メンバーとして委嘱、これを了承した。また、日本学術会議関係の報告を地球化学宇宙化学研究連絡委員会委員の秋山、木越両評議員にお願いした。

*新任期の初めての顔合わせでもあり、学会の役割、運営につき自由な意見交換を行った。

会員現況(1986年2月28日現在)

新入会員

正会員

今岡照喜 広島大学理学部地鉱

勤務先 〒730 広島市中区東千田町1-1-89
(082-241-1221)

自宅 〒732 広島市東区戸坂山根2丁目4-21
(082-220-0935)

三宅 隆 東京大学理学部化学科
勤務先 〒113 文京区本郷7-3-1
(03-812-2111)
自宅 〒112 文京区白山4-21-6 バイ
オレット白山B-101
(03-941-6399)
和田恵治 北海道教育大学旭川分校
勤務先 〒070 旭川市北門町9丁目
(0166-51-6151)
自宅 〒070 旭川市春光町2区1条合同宿
舎501-31
(0166-54-3769)

変更
岩熊敏夫 所属・自宅住所変更 国立公害研究所生
物環境部 〒305 茨城県筑波郡谷田部町小野川
16-2, 自宅 〒277 柏市あけぼの1-3-20-801
(0471-44-6184)
奥野 満 住所変更 〒194 町田市本町田 68-口-416
熊丸尚宏 所属変更 広島大学理学部化学教室
〒730 広島市中区東千田町1-1-89(082-241-1221)
倉沢 一 所属・自宅住所変更 地質調査所海外地
質調査協力室 〒305 茨城県筑波郡谷田部町東
1-1-3 (0298-54-3575), 自宅 〒300 土浦市
西根南1-8-14 (0298-42-3354)
古川征弘 所属変更 栗田工業(株)総合研究所水
処理装置本部技術部原子力チーム 〒243-01
厚木市森の里若宮7-1 (0462-48-2573)
不破敬一郎 所属変更 国立公害研究所 〒305
茨城県筑波郡谷田部町小野川16-2
堀部純男 住所変更 〒156 世田谷区赤堤1
-24-16-43 佐藤方 (03-325-0307)
吉村和久 所属変更 〒九州大学教養部化学教室
〒810 福岡市中央区六本松4-2-1(092-771-4161)

退会
秋山悌四郎, 阿部正宏, 荒井康司, 糸魚川忠平,
猪木幸男, 梶谷 敬, 加藤敬香, 香山 真, 北原重
登, 久城育夫, 熊坂繁太郎, 坂本尚史, 桜井澄子,
地引久和, 杉浦精治, 田中裕敏, 鶴見浩一郎, 寺町
和宏, 仲野尚一, 中村孝一, 土永恒弥, 仲野尚一,
野又 章, 番場猛夫, 二間瀬 利, 町田喜弘, 水野
篤行

○昭和61年度学会開催予定
5月
3~5 日本地質学会年会 山形大学
17~19 質量分析連合討論会 東京農工大工学部

21~22 日本分光学会春季講演会 東京大学理学部
21~23 日本気象学会春季大会 気象庁
27~30 日本鉱物学会年会 愛知県産業貿易館
6月
6~7 日本分析化学会討論会 群馬大学教育学部
7月
1~3 理工学における同位
元素研究発表会 国立教育会館
14~16 日本原子力学会放射性
廃棄物セミナー 鳥取県三朝温泉
8月
17~22 国際ゼオライト会議 京王プラザホテル
20~23 日本第四紀学会 地質調査所
28~29 日本温泉科学会 上田市別所
10月
1~4 日本粘土学会年次総会 東京工業大学
2~5 日本陸水学会大会 東海大学海洋学部
4~5 鉱物・鉱山地質・
岩石鉱物鉱床三学会 茨城大学
6~10 日本海洋学会秋季大会 九州大学農学部
11~13 日本地球化学会年会 富山大学
11~14 日本分析化学会年会 岡山大学教養学部
16~19 日本化学会秋季年会 名古屋大学
18~20 日本原子力学会分科会 九州大学工学部
11月
16~18 大気汚染学会 京都市

編集者 松久幸敬
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所鉱床部
電話 0298(54) 3636
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(817) 5801
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 108

1986. IX. 1

1986年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日 時 10月11日(土)~13日(月)
会 場 富山大学理学部2号館(富山市五福3190)
年会準備委員会 富山大学理学部 水谷義彦
(富山市五福3190) 電話0764(41) 1721

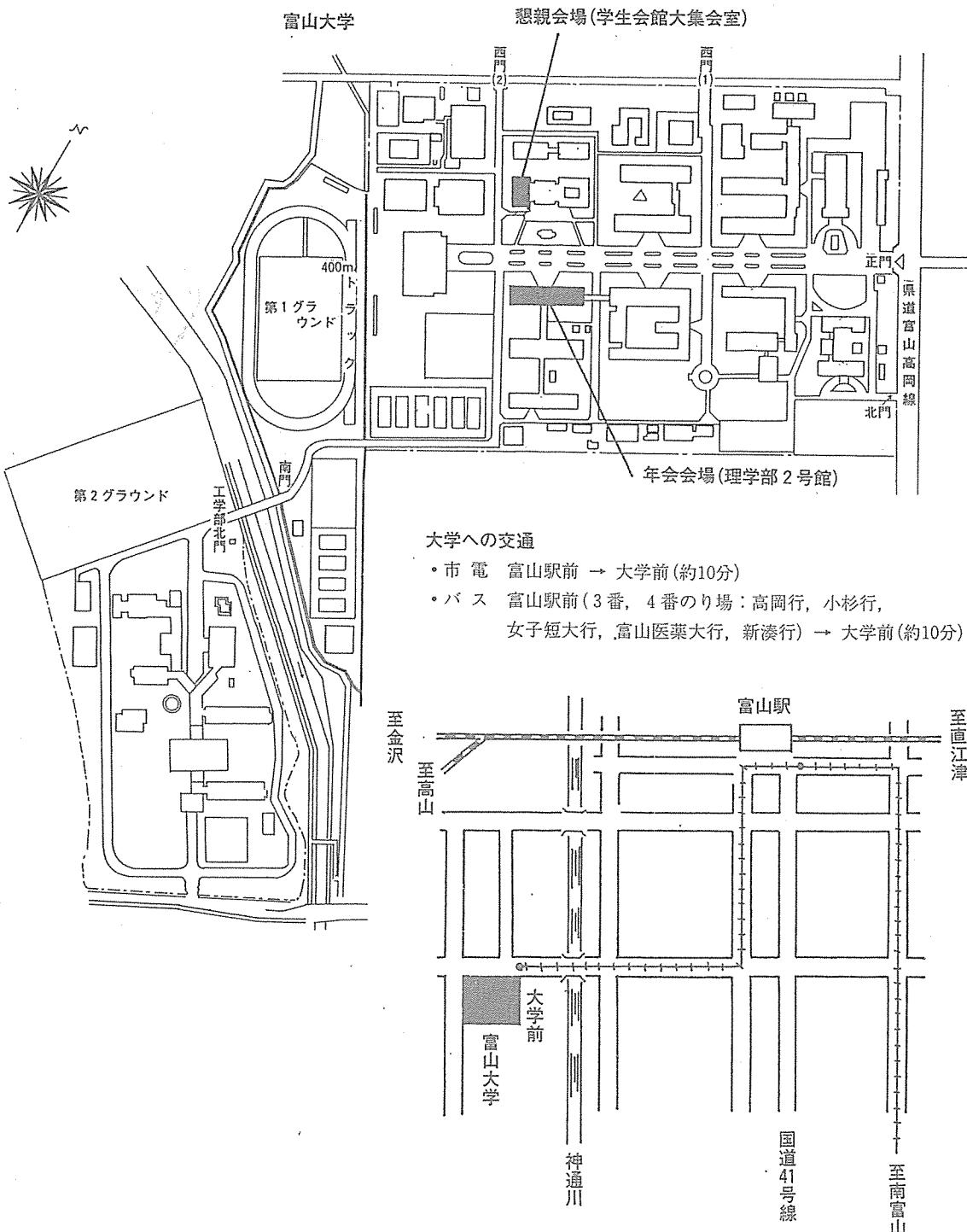
会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
(土) 11日	A	受付	一般講演 (大気・降水)		一般講演 (大気・降水)					
	B		一般講演 (岩石・地殻)		一般講演 (有機物・堆積物)					
	C		一般講演 (鉱床)		一般講演 (温泉・熱水)					
	D		一般講演 (地球外物質)		一般講演 (地球外物質・その他)					
(日) 12日	A		課題講演 (環境同位体)		課題講演 (環境同位体)	特別講演	総会			懇親会
	B		一般講演 (炭酸塩)		一般講演 (土壌)					
	C		一般講演 (地震・火山ガス)		一般講演 (火山ガス)					
	D		一般講演 (有機物)		一般講演 (岩石・年代)					
(月) 13日	A		一般講演 (海洋)	ポスター討論時間	一般講演 (海洋)					
	B		一般講演 (陸水)		一般講演 (陸水)					
	C		一般講演 (希ガス・岩石・水反応)		一般講演 (岩石・水反応)					
	D		一般講演 (生物・環境)		一般 (環境)					

講演時間: 一般講演は討論を含めて15分, 課題講演は討論を含めて25分。

懇親会: 10月12日(日)18時より学生会館大集会室にて行なう。会費 4,000円(学生 3,000円)

エクスカーション：10月10日（金）8月30分～17時、費用6,000円（昼食付）観光バスによる立山登山。

年会会場案内図



第1日 10月11日（土）

A会場

一般講演（9:30～10:45）座長 渡辺修一

1 A 01 南極昭和基地の二酸化炭素濃度（1985年）
村山治太（横浜国大教育）

1 A 02 筑波におけるCO₂分圧とδ¹³Cについて
○井上久幸・杉村行勇（気象研）

1 A 03 北太平洋西部における大気及び表面海水中のCO₂分圧とそのδ¹³Cについて ○井上久幸・杉村行勇（気象研）

1 A 04 宇宙線生成核種・⁷Beの降下量と気象要素との関連 加藤喜久雄・○小尻英博・古川路明（名大水圈研・名大理）

1 A 05 北太平洋上エアロゾルのPb-210, Bi-210, Po-210 ○横田喜一郎・角皆静男（北大水産）
(10:50～12:05) 座長 井上久幸

1 A 06 函館近郊の標高10mと1000mの2地点におけるAI降下量の季節変動 ○鈴木利孝・角皆静男（北大水産）

1 A 07 大気中の微量元素（I） ○金森 悟・金森暢子・伊佐恵理子（名大水圈研）

1 A 08 大気中の微量元素（II） 金森 悟・○金森暢子・伊佐恵理子（名大水圈研）

1 A 09 都市大気中の粒子状水銀の粒径分布 ○中川良三・立本英機（千葉大理・千葉大工）

1 A 10 大気エアロゾル中のRb, Srの蛍光X線分析による測定及びその地域特性 ○田島将典・栗原 真・田中 茂・橋本芳一・西川雅高（慶大理工・国立公害研）
(13:15～14:15) 座長 金森 悟

1 A 11 海洋一大気間におけるω-オキソカルボン酸の存在 ○河村公隆・R. B. Gagosian（ウッズホール海洋研）

1 A 12 大気中におけるハロカーボンとメタンの分布と動態 ○卷出義紘・久保祐治・富永 健（東大理）

1 A 13 粒径分画したエアロゾルの有機物組成 太田 啓一（名大水圈研）

1 A 14 大気エアロゾル中の多環式芳香炭化水素濃度と気象要因 ○小野崎研郎・小倉紀雄（東京農工大農）
(14:20～15:20) 座長 堀内正久

1 A 15 多摩川流域における大気降下物の分布と季節変動 ○小倉紀雄・馬場基浩（東京農工大農）

1 A 16 雨水中の微小粒子の粒径別化学組成 ○山中 一夫・三浦一郎・田中 茂・橋本芳一（慶大理工）

1 A 17 降水中のリン ○角皆静男・高橋栄一・鈴木利孝（北大水産）

1 A 18 浦和における降水中のケイ酸濃度について ○君島克憲・金安洋子・小沢竹二郎（埼玉大工）
(15:30～16:45) 座長 橋本哲夫

1 A 19 新潟県と関東地方の降水成分の差異 ○福崎紀夫（新潟衛生公害研）

1 A 20 日本海側地方の降水中的トリチウムのスプリングピーク 角皆静男・渡辺修一・西山伸司・石田宗博・○渡辺 豊（北大水産）

1 A 21 ソ連原発事故後における東京雨水中のトリチウム濃度 堀内正久・渡辺孝志・木越邦彦（学習院大理）

1 A 22 筑波の大気中で観測された Chernobyl 原発事故に由来する放射性核種とその時間変動 ○青山道夫・廣瀬勝己・井上久幸・鈴木款・杉村行勇（気象研）

1 A 23 Chernobyl 原発事故に由来する放射性物質の日本各地における降下量 ○青山道夫・廣瀬勝己・杉村行勇（気象研）

B会場

一般講演（9:45～10:45）座長 清水 洋

1 B 01 西南日本外帯酸性岩類の微量元素 ○岡本健二・藤田光一・木下 修・八木伸二郎（大阪府大総合科学）

1 B 02 山陰地域新生代火山岩類のSr, Nd同位体比 P. A. Morris・○加々美寛雄（シドニー大・岡山大地球セ）

1 B 03 セリウムの負の異常を持つ深海底堆積物の分別抽出 ○豊田和弘・中村裕二・脇田 宏（東大理）

1 B 04 ブラジルの CANABRAVA mafic および ultramafic complex の成因・希土類元素存在度からの制約 藤井マウロ安男・中村 昇・山本剛志（神戸大理）
(10:50～12:05) 座長 加々美寛雄

1 B 05 ICP質量分析計による地球化学的試料中の希土類元素の定量 ○平田岳史・清水 洋・増田彰正（東大理）

1 B 06 木村石を含む火成岩中の希土類元素の測定 ○赤木 右・増田彰正・清水 洋・中井俊一（東大理）

1 B 07 石灰中の希土類元素 ○中西幸雄・鈴木章悟・平井昭司（武藏工大原研）

1 B 08 黒鉱に伴う頁岩の希土類元素存在度 松本

良・○鹿園直建・歌田 実 (東大理・東大資料)
 1 B 09 先カンブリア時代の石灰岩中の希土類元素
 ○上岡 晃・増田彰正 (地調・東大理)
 (13:15~14:15) 座長 鈴木徳行
 1 B 10 ラジカル濃度とスピニ-格子緩和時間による
 ケロジエンの熟成度評価 M. Bakr・○秋山
 雅彦 (北大工・北大理)
 1 B 11 Kerogen に組みこまれた脂質及び脂質由来の
 構造の地球化学的意義 福島和夫 (都立大理)
 1 B 12 堆積高分子有機物の酸化分解Ⅳ 合成ケロジエン
 (メライノジン)の解析 ○森永茂生・
 石渡良志・山本修一・町原 勉 (都立大理・
 桐陰工専・石油公団)
 1 B 13 新潟と南関東の堆積盆地のノルマルパラフィンの比較 米谷 宏 (地調)
 (14:20~15:20) 座長 秋山雅彦
 1 B 14 琵琶湖堆積物中の生物起源多環香族炭化水素
 ○石渡良志・星野英一郎・森永茂生・鶴崎
 実 (都立大)
 1 B 15 宍道湖中央湖底 2 m 柱状試料中の海成・非海
 成フミン酸とケロジエン ○鈴木徳行・松本
 英二 (島根大理・地調)
 1 B 16 南極 Lutzow-Holm 湾のコアサンプル中の有
 機成分 ○松本源喜・佐々木清隆・綿抜邦
 彦・鳥居鉄也 (東大教養・東大理・千葉工
 大)
 1 B 17 基礎試錐「金沢沖」柱状堆積物中のステラン
 及びトリテルパン 町原 勉 (石油公団)
 (15:30~16:45) 座長 石渡良志
 1 B 18 海洋表層堆積物中の non-solvent extractable
 脂質の起源と地球化学的性質 西村弥亜 (愛
 知学院大・教養)
 1 B 19 琵琶湖表層における有機物生産 1. 生産物の
 日周変化について ○濱 健夫・半田暢彦・
 松永捷司・高橋幹雄 (名大水圈研・琵琶湖研)
 1 B 20 琵琶湖表層における有機物生産 2. 生産物の
 C/N 値の季節変化について ○濱 健夫・
 半田暢彦・松永捷司・高橋幹雄 (名大水圈研・
 琵琶湖研)
 1 B 21 コベホーダの糞粒とその餌生物との有機物組
 成の相違 ○松枝秀和・半田暢彦・戸田任重
 (名大水圈研・東大理)
 1 B 22 琵琶湖における栄養塩類の回帰と酸素消費
 ○松永捷司・半田暢彦・濱 健夫・高橋幹雄
 (名大水圈研・琵琶湖研)

C会場
 一般講演 (9:30~10:45) 座長 梶原良道
 1 C 01 流体包有物中の水の $\delta^{18}\text{O}$ から石英の熱履歴
 を推定する試み ○大場 武・風早康平 (東
 工大理・地調)
 1 C 02 酸素同位体比と流体包有物からみた北海道豊
 羽鉱床の熱水系 ○松久幸敬・矢島淳吉・太
 田英順 (地調)
 1 C 03 石墨・方解石結晶内の炭素・酸素同位体比の
 帯状分布について ○和田秀樹・伊藤良三
 (静岡大理)
 1 C 04 鉱床を伴う熱水系の炭酸塩鉱物の酸素・炭素
 同位体組成 鹿園直建 (東大理)
 1 C 05 島弧・海嶺の熱水系における硫黄同位体の挙
 動 ○鹿園直建・川幡穂高 (東大理・地調)
 (10:50~12:05) 座長 鹿園直建
 1 C 06 イベリア黄鉄鉱床帯の硫黄同位体比
 ○山本雅弘・加瀬克雄・光野千春 (岡山大理)
 1 C 07 硫化鉱物の熱水反応, $\text{FeS}_2\text{-CuFeS}_2$ 系
 ○水上正勝・日下部実・千葉 仁 (函館工
 専・岡大地球セ)
 1 C 08 海嶺熱水鉱床の起源と分化 梶原良道 (筑波
 大学地球科学)
 1 C 09 有機物によるウランの還元反応のシミュレー
 ション実験 ○中島 悟・A. Perruchot (原
 研・フランス国立科学研究所)
 1 C 10 熱水中でのタンクステンの輸送について
 渋江靖弘 (東大理)
 (13:15~14:15) 座長 水上正勝
 1 C 11 温泉中の微量希土類元素の放射化分析につい
 て ○本多照幸・野崎徹也・小坂知子・垣花
 秀武 (武藏工大原研・上智大理工)
 1 C 12 草津・自根地区温泉水中の希土類元素の分布
 一 Oddo-Harkins 則について一 ○垣花秀
 武・小坂知子・野崎徹也・本多照幸 (上智大
 理工・武藏工大原研)
 1 C 13 熊の湯・湯田中・松代・戸倉・星野・上諏
 訪・有馬などの温泉水中のホウ素同位体比と
 日本列島弧との関連 垣花秀武・大井隆夫・
 ○武藏正明・小坂知子・野村雅夫 (上智大
 理工・東工大原子炉研)
 1 C 14 本邦の高温酸性泉と火山活動との関係 佐藤
 幸二 (中央温泉研)
 1 C 15 ケイ酸の重合に及ぼすアルミニウムの促進及
 び阻害効果 ○高橋洋子・横山拓史・鶴谷俊
 和 (九大理)
 (14:20~15:20) 座長 清穂保弘
 1 C 16 ケイ酸の重合に及ぼすアルミニウムの促進及
 び阻害効果 ○高橋洋子・横山拓史・鶴谷俊
 和 (九大理)

1 C 17 阿寒, 新見温泉のマンガン沈殿物 鈴木励子
 (東北大教養)
 1 C 18 山梨県内の温泉水中の銅について 杉原
 健・○島口たけみ (山梨大教育)
 1 C 19 化学的にみた仙岩地域の地熱構造 ○野田徹
 郎・阿部喜久男・竹野直人・高橋正明 (地調)
 (15:30~16:45) 座長 野田徹郎
 1 C 20 群馬県大戸の Ca-Na-Cl 型塩水について
 ○酒井幸子・松葉谷治 (群馬衛生公害研・秋
 田大鉱山)
 1 C 21 秋田県玉川温泉の溶存成分の経年変化 (続)
 吉池雄藏・岡村 忍 (東邦大理)
 1 C 22 滝の上地域における地熱流体の起源 ○清穂
 保弘・吉田 裕 (名大理・日重化)
 1 C 23 熱水変質を受けた海洋地殻 (Hole 504B) の
 同位体地球化学 川幡穂高・○日下部 実・
 菊地美子 (地調・岡山大地球セ)
 D会場
 一般講演 (9:30~10:45) 座長 海老原 充
 1 D 01 C-シアノメタニイミンのマイクロ波スペク
 トルの測定と星間分子としての探索 ○高野
 秀路・杉江正昭・竹尾陽敏・松村 知・朽津
 耕三・増田彰正・鈴木博子 (東大理・化学技
 研・東京天文台)
 1 D 02 星間塵の炭素質前駆体が示す赤外未同定ライ
 ン ○坂田 朗・和田節子 (電気通信大)
 1 D 03 Yamato-791198炭素質コンドライト中の炭化
 水素及びカルボン酸 ○下山 晃・奈良岡
 浩・原田 錠 (筑波大化)
 1 D 04 気相成長ダイヤモンドと隕石中炭素物質につ
 いて ○福永一哉・松田准一・長尾敬介・宮
 本正道・伊藤敬祐 (神戸大理・岡山大理・東
 大教養)
 1 D 05 南極隕石採集地域の水中火山灰の同定
 ○福岡孝昭・新井房夫・西尾文彦 (学習院大
 理・群馬大教育・極地研)
 (10:50~12:05) 座長 長沢 宏
 1 D 06 南極隕石中の微量元素 1—Yamato 691エン
 スタタイト・コンドライト ○海老原充・清
 水明彦・根本明彦・赤岩英夫 (群馬大教養・
 群馬大工)
 1 D 07 Yamato-79溶融コンドライト隕石の熱履歴
 岡野 修・○中村 昇 (神戸大理)

1 D 08 鉄隕石 Trenton 中の宇宙線生成 ^{53}Mn の分布
 一大きな鉄隕石の一例 島 正子 (国立科学
 博物館)
 1 D 09 炭素質隕石 Belgica-7904の希ガス同位体組成
 ○長尾敬介・松田准一 (岡山理大・神戸大理)
 1 D 10 ユーレイライトの中の希ガス同位体組成
 ○高岡寛雄・関井秀一 (山形大理)
 (13:15~14:15) 座長 中村 昇
 1 D 11 ケイ酸塩鉱物の始原物質とコンドリュール生
 成 ○和田節子・坂田 朗 (電気通信大)
 1 D 12 Allende コンドリュールの前駆物質 ○三澤
 啓司・中村 昇 (神戸大自然科学・神戸大理)
 1 D 13 北米及び CPX マイクロテクタイト中の微量
 元素 ○長沢 宏・福岡孝昭・B. P. Glass
 (学習院大理・デラウェア大)
 1 D 14 アエンデ, インクルージョン HN-1 中の元
 素の分布 ○長沢 宏・永原裕子・Gerardo
 Sanchez-Rubio (学習院大理・東大理・メキ
 シコ国大)
 (14:20~15:20) 座長 森岡正名
 1 D 15 Happy Canyon 隕石 (エンスタタイトエコン
 ドライト) の化学組成 福岡孝昭 (学習院大
 理)
 1 D 16 月隕石における希土類元素存在度からの化
 学的研究及び年代学的研究 ○高橋和也・清
 水洋・増田彰正 (東大理)
 1 D 17 Tieschitz (H 3) 非平衡コンドライト隕石の
 コンドリュール中における希土類元素の分布
 ○永本浩之・中村 昇・三澤敬司・西川賢之
 (神戸大理)
 1 D 18 蒸発に伴う隕石中の希土類元素の分別
 ○米田成一・清水 洋・増田彰正 (東大理)
 (15:30~16:45) 座長 福岡孝昭
 1 D 19 西グリーンランド産岩石中の希ガス-原始キ
 セノンを探す試み 斎藤和男 (山形大理)
 1 D 20 衝突破壊による脱ガス実験 ○松田准一・長
 尾敬介・高木靖彦・水谷 仁 (神戸大理・岡
 山理大・名大理)
 1 D 21 重力のもとにある気体の熱平衡状態につい
 て ○木越邦彦 (学習院大理)
 1 D 22 メリ石中に於るイオンの拡散 ○森岡正名・
 長沢 宏・井原 徹 (東大アイソトープセ・
 学習院大理)
 1 D 23 堆積物中のテクネチウムの拡散と固定
 ○中嶋 悟・喜多治之 (原研)

第2日 10月12日 (日)

A会場

課題講演 [環境における放射性および安定同位体の動態]

コンビーナー 阪上正信・佐竹 洋
(9:00~9:50) 座長 中井信之

2 A01 富山における降水・降雪の安定同位体の動態
佐竹 洋 (富山大理)

2 A02 トリチウムの動態による降水の研究 ○山田
芳宗・斎 幹夫・加藤岩夫・阪上正信 (金沢
大理低レ放)
(9:50~10:40) 座長 佐竹 洋

2 A03 大気中の放射性核種濃度の変動に関する研究
○多田哲郎・趙 蘭才・小村和久・阪上正信
(金沢大理低レ放)

2 A04 海洋における Pb-210, Po-210 及び Th 同位体
の挙動 ○原田 晃・田口和典・角皆静男
(北大水産)
(10:45~12:00) 座長 角皆静男

2 A05 沿岸堆積物中の¹³⁷Cs と ²¹⁰Pb 松本英二 (地
調)
(11:00~11:50) 座長 相沢省一

2 A06 海洋における Th のスカベンジング ○野崎
義行・梁 漢燮・山田正俊 (東大洋研)

2 A07 日本海における²³⁹, ²⁴⁰Pu の動態 ○中岡
孝・大領真美 (金沢大理)
(13:00~14:15) 座長 野崎義行

2 A08 大気中の放射性クリプトンの分布 ○鈴木
款・井上久幸・杉村行勇 (気象研)

2 A09 大気圏及び海洋の¹⁴C 濃度変動と炭素サイクル
中村俊夫・中井信之・木村雅也・大石昭
二・坪田博元 (名大アイソトープセ・名大
理・広島大総合科学・富士通エンジニアリング)

2 A10 成層圏及び対流圏大気中の CO₂ の $\delta^{13}\text{C}$ - $\delta^{18}\text{O}$ 関係 ○蒲生俊敬・堤 真・酒井 均・
中沢高清・村山昌平 (東大洋研・東北大
理・宇宙科学研)
(14:15~15:25) 座長 松本英二

2 A11 琵琶湖底堆積物中の人間活動の記録—堆積有
機物の¹³C, ¹⁴C— ○中井信之・中村俊夫・
木村雅也・大石昭二 (名大理・名大アイソ
トープセ)

2 A12 人類の食生態系における炭素窒素同位体の分
布 ○南川雅男・柄沢享子・蒲谷裕子 (三菱
化成・生命研)

2 A13 気体中の低レベル β 線の測定 木越邦彦 (学
習院大理)

B会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 大森 保
2 B01 炭酸塩岩中の有機物組成の特徴と統成作用
寺島美南子 (地調)

2 B02 統成過程におけるガスハイドレイトと自生炭
酸塩鉱物の関係 松本 良 (東大理)
2 B03 水中における炭酸カルシウム多形のカルサイ
トへの交換の律速過程 ○荻野 健・鈴木俊
雄・澤田 清 (新潟大理)

2 B04 サンゴのアラゴナイトからカルサイトへの変
質における亜鉛, 銅の影響 吉岡小夜子 (愛
教大)
(10:10~10:50) 座長 吉岡小夜子

2 B05 炭酸カルシウムの表面電位 ○岡田昌二・鈴
木俊雄・澤田 清 (新潟大理)

2 B06 炭酸マンガン鉱床の成因 ○箕浦幸治・中谷
周・竹村厚司 (弘前大理・京大理)

2 B07 炭酸塩岩の生成統成過程におけるカドミウム
の地球化学的挙動 ○相沢省一・赤岩英夫
(群馬大工)
(11:00~11:50) 座長 相沢省一

2 B08 竹富島沖サンゴ礁堆積物中における重金属
(Hg, Sb, As, Cd, U, Mn) の異常濃縮
○大森 保・兼島 清・小山睦夫 (琉球大理)

2 B09 バッサナイト (CaSO₄ · 0.5 H₂O) へのスト
ロンチウムの取り込み ○三好登和子・今橋
正征・吉野諭吉・甲木和子 (東邦大学理)
2 B10 地熱熱水から生成するケイ酸質沈殿物中に濃
縮される元素とその分布 ○佐藤由美・横山
拓史・樽谷俊和 (九大理)
(13:00~14:00) 座長 坂田昌弘

2 B11 非晶質アルミノケイ酸塩 (含鉄) の焼成によ
る構造変化: ESR 及び固体高分解能 NMR に
よる研究 ○渡部徳子・清水 洋・増田彰
正・二宗啓介・横山拓史・樽谷俊和・齊藤
肇 (放送大・東大理・九大理・ガンセンター)

2 B12 石英砂からの熱蛍光写真のカラー画像解析
橋本哲夫・○横坂恭一・葉葺久尚 (新潟大理)

2 B13 天然石英からの熱蛍光の発光特性 ○橋本哲
夫・横坂恭一・葉葺久尚 (新潟大理)

2 B14 北部北海道における土壤重金属の濃度分布図
○菅 和哉・黒沢邦彦 (北海道地下資源)

2 B15 土壤内における微量元素の吸着と移動のモ
デル化 坂田昌弘 (電力中研)
(14:10~15:10) 座長 小倉紀雄

2 B16 黄砂現象によるアジア大陸からの土壤粒子の
移動とわが国の大気に及ぼす影響 ○栗原

真・田島将典・田中 茂・橋本芳一・大歳恒
彦 (慶大理工・日本環境衛生セ)

2 B17 火山灰土壤中のクリストバライトの酸素同位
体組成 ○溝田智俊・藤 信夫・松久幸敬
(九大農・地調)

2 B18 中国砂漠地帯の土壤中のトリウムとウラン同
位体について ○廣瀬勝己・杉村行勇 (気象
研)

C会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 川辺岩夫

2 C01 ヘリウム同位体比の分布とニュージーランド
のテクトニクス ○佐野有司・脇田 宏・
W. F. Giggenbach (東大理・DSIR)

2 C02 ニュージーランド地熱地帯の希ガス同位体組
成 ○長尾敬介・板谷徹丸・岡田利典 (岡山
理大)

2 C03 非火山地域における³He 异常と群発地震活動
○脇田 宏・佐野有司・溝上 恵 (東大理・
東大震研)

2 C04 Ge(int) 検出器による松代地震断層の γ 線探
査 ○吉田則夫・塚原弘昭 (国立防災セ)
(10:10~10:50) 座長 佐野有司

2 C05 地下流体は何故地殻応力に鋭敏なのか? 地下
流体地殻応力計 (その1) 川辺岩夫 (愛媛
大理)

2 C06 地震と関係した地下ガス組成の変動 ○永峰
康一郎・杉崎隆一 (名大理)

2 C07 活断層中の He, Ne, Ar, N₂ の挙動と起源
杉崎隆一 (名大理)
(11:00~11:50) 座長 吉田則夫

2 C08 跡津川断層における H₂ モニターによる水素
の連続測定 ○水林 修・佐竹 洋・木村郁
彦 (富山大理・センサーテック)

2 C09 地球化学的方法による噴火予知のための予備
調査: 桜島における土壤ガス Rn の分布と遷
元性ガスの連続観測 ○日下部 実・平林順
一 (岡山大地球セ・東工大工)

2 C10 1955年から1985年の間の火山の噴出物 ○鎌
田政明・坂元幸雄・山崎俊司 (鹿児島大理)
(13:00~14:00) 座長 中村裕二

2 C11 噴火予知のためのポリチオノ酸の in situ モ
ニタリング ○高野穆一郎・綿抜邦彦 (東大
教養)

2 C12 地熱地域における土壤ガスの化学及び同位体
組成の特徴 ○北 逸郎・田口幸洋・長尾敬
介 (秋田大鉱山・九大生研・岡山理大)

2 C13 堆積岩の加熱により放出されるガス組成

清木保弘 (名大理)

2 C14 共存するメタンと水素の炭素及び水素の同位
体比測定 ○堤 真・酒井 均 (東大洋研)
(14:10~15:25) 座長 北 逸郎

2 C15 ガスクロマトグラフによる火山ガスの現場分
析, II ○河野浩二・渡辺博之・鈴木紀夫・
大場 武・大隅多加志 (東工大理)

2 C16 火山ガスの流量と化学組成の関係 ○斎藤元
治・松尾禎士 (東工大理)

2 C17 1985年における那須岳噴気孔ガスの同位体組
成 ○八野祐二・水谷義彦 (地熱技術開発・
富山大理)

2 C18 福徳岡之場海底火山1986年噴火における噴出
物の化学成分 ○小坂丈予・平林順一・土出
昌一 (岡山大理・東工大工・水路部)

2 C19 ハワイ・ロイヒ海底火山における熱水ブ
リュームの地球化学的研究 ○石橋純一郎・
蒲生俊敬・酒井 均・赤木 右・五十嵐丈
二・小寺雅子・小嶋 稔・B. Tilbrook (東
大洋研・東大理・ハワイ大)

D会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 南川雅男

2 D01 間隙水中のアミノ酸分析に関する検討
○石塚明男・小池勲夫 (東大洋研)

2 D02 東京湾の間隙水中のアミノ酸について
○石塚明男・V. Ittekot・E. T. Degens (東
大洋研・ハンブルク大)

2 D03 中部大西洋の間隙水中のアミノ酸について
○石塚明男・野崎義行・下岡謙司 (東大洋
研・原研)

2 D04 浜名湖ボーリングコアから得た間隙水中の無
機元素とアミノ酸の分布 ○加藤義久・石塚
明男・阿部泰行・和田秀樹 (東海大洋・東
大洋研・静大理)
(10:10~10:50) 座長 和田英太郎

2 D05 堆積有機物の起源に関する研究 1, 水中お
ける脂質クラスの組成変化 ○小椋和子・大
塚 晋 (都立大理)

2 D06 トランス-4-ハイドロキシ桂皮酸の酵素によ
るオリゴメライゼイション・その腐植化への
意義 ○片瀬隆雄・J. M. Bollag (神奈川衛
生大・ベンシルバニア州大)

2 D07 杉年輪の酸素同位体の変化 ○北川浩之・和
田秀樹 (静岡大理)
(11:00~11:50) 座長 和田秀樹

2 D08 生物地球化学試料中のアミノ酸の C, N 同位
体比の測定 ○南川雅男・柄沢享子 (三菱化
成)

成生命研)

2 D 09 海洋における懸濁態有機窒素の¹⁵N 自然存在比とその変動 ○才野敏郎・服部明彦(東大洋海研)

2 D 10 湖沼及び沿岸における炭素・窒素同位体の分布とその意義 ○和田英太郎・吉岡崇仁(三菱化成生命研)
(13:00~14:00) 座長 田中 剛

2 D 11 日本の油田水の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 比とグリーンタフ火山活動 ○野津憲治・脇田 宏・中村祐二(筑波大化・東大理)

2 D 12 東北火山弧熔岩中の¹⁰Be/⁹Be 比と島弧におけるマグマ発生 ○今村峰雄・井上照雄・柴田誠一・永井尚生・宮沢健一・吉田邦夫・山下 博・小林絢一・高岡宣雄・大場与志男・野津憲治(東大核研・日大文理・東大理・東大原セ・山形大理・筑波大化)

2 D 13 日本海海山からドレッジされた岩石の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 比と年代 ○野津憲治・兼岡一郎・滝上 豊・藤岡換太郎・酒井 均(筑波大化・東大理・東大洋海研)

2 D 14 長野県分杭崎南方, 中央構造線付近の岩石の同位体年代 ○柴田 賢・高木秀雄(地調・早大教育)
(14:10~15:25) 座長 野津憲治

2 D 15 隠岐島後変成岩の Sm-Nd 全岩年代について ○田中 剛・星野光雄(地調・名大教養)

2 D 16 ICP 質量分析計による Re-Os 法の開発 ○平田岳史・清水 洋・増田彰正(東大理)

2 D 17 年代学的比較に基づく La-138 の壊変定数についての研究 ○中井俊一・清水 洋・増田彰正(東大理)

2 D 18 熱中性子フルエンスの絶対測定とそのフィッショントラック年代への応用(その1) ○本多照幸・雁沢好博・野崎徹也(北海道教育大・武藏工大原研)

2 D 19 熱中性子フルエンスの絶対測定とそのフィッショントラック年代への応用(その2) ○雁沢好博・本多照幸・野崎徹也(北海道教育大・武藏工大原研)

特別講演 A 会場 (15:30~16:20) 座長 阪上正信
Nuclear geochemistry 1936~1986
P. K. Kuroda (Arkansas Univ.)

総 会 A 会場 (16:30~17:30)

第 3 日 10月13日 (月)

A 会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 蒲生俊敬

3 A 01 沿岸・近海表層水中の溶存有機物と重金属 ○下島公紀・早瀬光司・坪田博行(広島大総合科学)

3 A 02 北太平洋における蛍光性有機物の鉛直分布 ○早瀬光司・砂田 功・坪田博行(広島大総合科学)

3 A 03 噴火湾における硫化ジメチル (DMS) の大きな周年変化と大気への逃散量 渡辺修一・○出村光司・角皆静男(北大水産)

3 A 04 海洋における溶存窒素・溶存炭素・酸素消費量の相互関係 ○杉村行勇・鈴木 欽(気象研)

3 A 05 表層海水におけるリン・窒素に比してケイ素の優先的減少 ○渡辺修一・乘木新一郎・長尾誠也・横田喜一郎・成田尚史・田口和典・角皆静男(北大水産)
(10:20~11:20) 座長 鈴木 欽

3 A 06 伊豆半島東方・相模湾初島沖の海底生物群集直上の底層水の化学的性質 ○蒲生俊敬・石橋純一郎・酒井 均・太田 秀・赤木 右・増田彰正・五十嵐丈二・小寺雅子・小嶋 稔(東大洋海研・東大理)

3 A 07 北西太平洋におけるマンガンの分布 豊田恵聖・○徳田雅一・園田 朗・長田正孝・岡部史郎(東海大洋海)

3 A 08 東京湾におけるスズの分布と収支 大山準一(気象大学校)

3 A 09 海水中の Mo, W の同時分析法と北西太平洋における Mo, W の分布 ○宗林由樹・桑本融・中山英一郎(京大理)
(13:00~14:00) 座長 増沢敏行

3 A 10 海水中の溶存カドミウムの分布 鈴木 欽・緑川 貴・杉村行勇(気象研)

3 A 11 海水中のセレンの状態に関する研究 中口 譲・○青野辰雄・平木敬三(近畿大理工)

3 A 12 海水中のセレン及びテルルの分布 ○鈴木 欽・杉村行勇(気象研)

3 A 13 海水中のヨウ素の自動分析法による分別定量とその分布について 中山英一郎(京大理)
(14:10~15:10) 座長 平尾良光

3 A 14 海底堆積物に含まれる粘土鉱物組成と化学種 ○青木三郎・神山宣彦(東洋大自然科学・産業医学総研)

3 A 15 東京湾堆積物中ウランの存在状態 角皆静

男・高橋禎明・○長尾誠也・原田 晃(北大水産)

3 A 16 日本海のマンガンクラストの微量成分組成 ○増沢敏行・小山睦夫(名大水圈研・京大原子炉)

3 A 17 熱水性マイクロマンガンノジュールの化学組成 ○杉谷健一郎・杉崎隆一・鈴木和博(名大理)

B 会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 松葉谷 治

3 B 01 1つの降雪雲からの降雪の $\delta^{18}\text{O}$ 値と δD の関係について ○杉本敦子・樋口敬二(名大水圈研)

3 B 02 南アラビア・オマーンの降水中の安定同位体組成 牛木久雄(東工大理)

3 B 03 チベット高原の天然水の同位体組成について ○加藤俊典・中井信之・西山 孝(名大理・京大工)

3 B 04 地下集塊氷(カナダ)の生成に関する研究 1—酸素同位体, 主要陰イオンの垂直分布— 加藤喜久雄(名大水圈研)

3 B 05 地下水中の安定同位体によるカナダ楯状地中の岩盤地下水拳動の把握 ○嶋田 純・C. C. Davison(清水建設・カナダ原子力公社)
(10:20~11:20) 座長 加藤喜久雄

3 B 06 秋田県岩見川における降水の直接流出の一例 ○松葉谷 治・吉田美那子(秋田大鉱山)

3 B 07 10年経過後のトリチウム濃度測定値を利用した栃木県那須温泉水の地下滞留時間の再検討 ○宮本霧子・植木千恵・岩倉哲男(放医研)

3 B 08 地すべり地地下水のトリチウム濃度と水質 ○佐藤 修・菅原 修(新潟大積雪災害セ・新潟大農)

3 B 09 山地地下水の化学組成の経年変化—六甲山系横尾山を例として ○吉岡龍馬・沖村 孝・佃 為成(京大防災研・神戸大工・東大震研)
(13:00~14:00) 座長 鶴見 実

3 B 10 南極昭和基地付近の湖沼水のモニタリング 村山治太(横浜国大教育)

3 B 11 マングローブ生育環境水の化学的研究 新垣 保・○渡久山 章(琉球大理)

3 B 12 琵琶湖流入河川水中の無機主要成分の研究 ○森井ふじ・田中好美・松村竹子(日本分析化学専・甲賀中・奈良教大)

3 B 13 手賀沼・印旛沼の溶存物質について ○君島 克憲・立本英機・小椋英明・小島邦夫・桑原

慎(埼玉大工・千葉大理・千葉大工)
(14:10~15:10) 座長 渡久山 章

3 B 14 多摩川上流部の沢水に含まれる化学成分の起源 ○鶴見 実・一国雅巳(東工大総合理工)

3 B 15 熊本県球磨川水系の河川水質 植木 肇(熊本衛生公害研)

3 B 16 栃木県葛生地域の河川水質 ○小椋英明・内田 敦・川崎逸郎・平山光衛・君島克憲・小沢竹二郎(千葉大理・宇都宮大教育・埼玉大工)

3 B 17 愛知県における環境水中の臭化物とヨウ化物の存在量について ○大沼章子・茶谷邦男(愛知衛研)

C 会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 脇田 宏

3 C 01 石英ガラス及び Obsidian 中の Ne 濃度 ○長尾敬介・松田准一(岡山理大・神戸大理)

3 C 02 アモルファスシリカ中の希ガスについて ○松田准一・長尾敬介・福永一哉・北 逸郎・田口幸洋(神戸大理・岡山理大・秋田大鉱山・九大生産研)

3 C 03 緑柱石に含まれる過剰 ^4He , ^{40}Ar の起源 ○豊田 新・小嶋 稔(東大理)

3 C 04 大陸地域の捕獲岩類の希ガス同位体比とその地球科学的意義—南極及び南アフリカ ○兼岡一郎・高岡宣雄(東大理・山形大理)

3 C 05 希ガス同位体組成からみたマグマソース 高岡宣雄(山形大理)
(10:20~11:20) 座長 高松信樹

3 C 06 岩石中のヒ素(III) 及びヒ素(V) の分析—溶出実験の適用— ○玉利祐三・北川雅啓・辻 治雄・日下 譲(甲南大理)

3 C 07 冷却速度の違いに伴う流紋岩質ガラスのイオン交換特性の変化 ○白木亮司・飯山敏道(東大洋海研・東大理)

3 C 08 地球化学・岩石化学的見地から見たコンクリートのアルカリ骨材反応 飯山敏道(東大理)

3 C 09 シリカ-X, シリカ-Y の生成に関する若干の観察 村石治人・○北原重登(福岡教大)
(13:00~14:00) 座長 日下部 実

3 C 10 模擬高レベル放射性廃棄物ガラス固化体の浸出拳動 I ○柳沢文孝・酒井 均(東大洋海研)

3 C 11 模擬高レベル放射性廃棄物ガラス固化体の浸出拳動 II ○柳沢文孝・酒井 均(東大洋海研)

研)

3 C 12 海水一岩石相互作用におけるリチウムの挙動
○高松信樹・今橋正征・上村京子（東邦大
一般教養）

3 C 13 ケイ酸塩溶融体一熱水溶液系における Cl^- ,
 Na^+ , K^+ の挙動について (800°C, 1.2Kb に
おける実験結果) ○篠原宏志・飯山敏道・松
尾禎士（東工大理・東大理）
(14:10~15:10) 座長 大隅多加志

3 C 14 400~460°C の水熱条件下におけるサーベン
ティン, フォルステライト及びタルクの生成
速度に関する研究 ○村石治人・北原重登・
永田秀雄（福岡教大）

3 C 15 ^{16}O - ^{17}O - ^{18}O プロットを利用した沸石の骨
格酸素同位体比の測定法 ○能登征美・日下
部・実（岡山大地球セ）

3 C 16 開放系での水の蒸発の際の同位体効果 鈴木
紀夫（東工大理）

3 C 17 热水溶液中の SO_2 不均化反応に伴うイオウ
同位体効果 薦田康夫・日下部実・千葉 仁
(岡山大地球セ)

D会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 西村弥亜

3 D 01 日本海海産生物中の放射性コバルト, 銀とそ
の安定元素との関係 ○樋口英雄・深津弘
子・野中信博・古清水克己・高野直人・木村
敏正（日本分析セ）

3 D 02 天然水中の有機態金属化合物の分析 中口
譲・○西野 庸・平木敬三（近畿大理工）

3 D 03 養殖マガキ *Crassostrea gigas* の重金属濃縮
坪田博行・○ペラス ゼナイダ・中沢 良・
早瀬光司（広島大総合科学）

3 D 04 マグロ骨中の鉛含量 平尾良光・○浅野正
樹・楳野順三・木村 幹・前田 勝・内田哲
男・飯田忠三（青山学院大理工・東京水産
大・名工大）

3 D 05 生体内微量元素の分布について (爬虫類を
中心として) ○寺井 稔・安福慎一・吉岡小
夜子（都立科技大・北里大衛生・愛教大）
(10:20~11:20) 座長 小椋和子

3 D 06 環境中の放射性及び安定ヨウ素の濃度と化学
形態 ○村松康行・大桃洋一郎（放医研）

3 D 07 都市水域におけるアルキルベンゼン- S 一異性
体組成による分離度の推定一 ○高田秀重・
石渡良志（東京農工大農・都立大理工）

3 D 08 人間活動起源硫黄化合物の硫黄サイクルへの
寄与 ○大橋哲二・中井信之（名大理）

3 D 09 都市物質系モデルにおける人間系の位置 秋
山紀子・○半谷高久（青山女短大・MV 研）
(13:00~14:00) 座長 吉田尚弘

3 D 10 分別溶解法による堆積環境の検討 金井 豊
(地調)

3 D 11 取手ボーリングから得られた泥質岩中の硫黄
量等と堆積環境 ○泊 武・黒田和男（地調）

3 D 12 完新世における東京湾西部の堆積環境の変化
○大石昭二・中井信之・中村俊夫（名大理・
名大アイソトープセ）

3 D 13 最終氷期以降の海面変動 松本英二（地調）

P会場

ポスターセッション (会期中掲示, 討論時間は13日
11:30~12:00)

P 01 水酸化アルミニウムへのケイ酸の吸着により
生成する非晶質アルミノケイ酸塩 ○二宗啓
介・鳥居俊介・横山拓史・樽谷俊和・渡部徳
子・斎藤 肇・増田彰正（九大理工・放送大教
養・東大理・ガンセンター）

P 02 新鮮なマントル物質による汚染されたマグマ
の浄化作用と島弧にみられる Sr, Nd, O 同
位体, 希土類元素存在度の帶状配列について
田中 剛（地調）

P 03 THQ, A newly developed thermal ionization
quadrupole isotope ratio mass spectrometer
J. Johemko (Finnigan MAT)

P 04 地質調査所岩石標準試料「火成岩シリーズ」
とその化学組成 ○安藤 厚・寺島 滋（地
調）

P 05 加速器質量分析計法の南西諸島考古学試料年
代測定への応用 平良初男・○比嘉賢一・兼
島 清・中井信之・中村俊夫（琉球大理・名
大理）

P 06 沖縄本島における人工放射性核種の分布につ
いて ○平良初男・兼島 清・岡本弘之（琉
球大理）

講演要旨集 3,500円 (送付のみも可)

申込先 〒930 富山市五福3190 富山大学理学部内
1986年度日本地球化学会年会準備委員会
水谷義彦

—「日本学術会議だより」の創刊に当たって—

日本学術会議は、第13期の活動の重点の1つとして、学・協会との連携の強化に努めるため、従来以上に広報活動の充実をは
かることとしております。
このたび、その一環として、当会議の活動状況を定期的にお知らせするため、今年5月から四半期ごとに「日本学術会議だよ
り」を各学・協会の機関誌等に御掲載願うことにいたしました。
今後も引き続き御一読いただければ幸いです。

100回を迎えた日本学術会議総会

日本学術会議は、去る4月23, 24日の両日、記念すべき第100回総会（第13期の3回目の総会）を開催いたしました。

今回の「日本学術会議だより」では、この第100回総会の議事の一環として行われた「脳死をめぐる諸問題」に関する会員間
の討論を中心として、同総会の議事内容をお知らせいたします。

当会議は、今後は、今回のような総会の報告のほかに、「第13期活動計画」に盛られた課題について具体的に検討を進めてい
る各常置・特別委員会の活動状況をも逐次お知らせしていきたいと考えております。

総会報告

日本学術会議第100回総会は4月23, 24日の両日に開かれ、「日本学術会議傍聴規則」及び「日本学術会議の運営の細則に
関する内規」を決定し、また、「脳死をめぐる諸問題」について意見交換を行った。

第1日、午前。会長より第4部会員田中春夫氏が逝去され、新たに早川幸男氏（名古屋大学）が会員として発令されたとの
報告があり、田丸第4部長が故田中会員への追悼の言葉を述べ、全員起立して黙禱をささげた。

会長より前回総会以後の経過報告を受けた後、諸委員会、部、研究連絡委員会の報告があった。広報委員会中川委員長より、
「日本学術会議だより」を多数の学・協会（387団体、約90万部）の機関紙などに掲載される運びになったことに対して感謝
の意が述べられた。高齢化社会特別委員会青井委員長より「高齢社会総合研究センター」（仮称）の設立についての中間報告
があった。平和問題研連川田委員長より、SDI研究への参加をめぐる最近の動きに対して憂慮の意が述べられた。

諸報告の後、会長より「日本学術会議傍聴規則案」が提案され、従来の傍聴についての内規を規則にして公にすることが適
切であると説明された。次いで「日本学術会議の運営の細則に
関する内規案」が提案された。この大部分は、今までの諸内規、慣行を整理したものであるが、いくつかの点で新しいもの
を含んでいる。主な点は①学術会議が勧告などを行う際の取り扱い及び講演会、シンポジウムなどを開催する手続を明確化
したこと、②研連委員の在任期間を原則として通常3任期（1任期は3年）までとしたことなどである。

第1日、午後。各部の部会が開かれ、午前中に提案された事
項について審議された。これらの提案は第1常置委員会が努力
を重ねて作成したものであり、また連合部会及び部会において、
各会員の意見を聞き調整したものであるが、この日の部会でさ
らに慎重な審議が行われた。

第2日、午前。前日提案された案件の審議、決定が行われた。
傍聴規則は異議なく決定された（注1）。運営の細則に関する
内規も、また無修正で決定された（注2）。新しい内規によれば、日本学術会議の名において行われる公開講演会は、運営審
議会において決定し、広報委員会が実施する。この点に関して、
その審議中、従来長年にわたって行われてきた学問・思想の自
由に関する公開講演会は今後も尊重されるべきであるとの発言
があり、その趣旨が了承された。

第2日、午後。近藤会長司会の下に「脳死をめぐる諸問題」
に関する会員間の意見交換が行われた。これは会員のための一
種の勉強会で、第13期から始められた新しいスタイルの総会の
持ち方の2回目に当たる。問題の一般的関心の深さを反映して
傍聴席は満席となった。勉強会は4会員による講演と、各講演
に連携した4名の指定発言者によるコメントによりなり、予定よ
り約30分超過し、3時間半にわたって、異なる分野からの意
見開陳が行われ、人文・自然両系よりなる学術会議にふさわし
い内容であった（詳細については別掲の「脳死をめぐる諸問題
について—総会の討論より—」を参照）。

第100回総会は「脳死」に関する様々な印象を会員に残しつ
つ、4時半無事終了した。

なお、6時から、第100回総会を記念した会員懇親会が、ロ
ビーでなごやかに開催された。

注1. 今回制定された「日本学術会議傍聴規則」の詳細につ
いては、「日本学術会議月報」5月号を参照

注2. 今回制定された「日本学術会議の運営の細則に関する内
規」は、総会、部、常置（特別）委員会及び研究連絡委員
会のそれらの運営に関する諸事項等について規定すると
ともに、外部から学術会議へ提出された要望等の処理に関
する手続、外部に対する学術会議の意思の表出（勧告・声
明等）に関する手続及び講演会、シンポジウム等の開催に
関する手続等について規定している。

脳死をめぐる諸問題について
—総会の討論より—

日本学術会議第100回総会第2日（4月24日）の午後、総会
議事の一環として、「脳死をめぐる諸問題」に関する会員間の
討論が行われた。

行われた4件の講演と各講演に連携した指定発言のそれぞれ
の概要は、以下のとおりであった。

1. 基調報告——医学的見地からみた死の概念
瞳孔が散大し、呼吸と心臓の拍動が永久的に停止したと医師
が判断したとき死亡したという。これに対して、最近、脳機能
が永久的にまた不可逆的に消失したとき脳死といい、だとえ心
臓が拍動していても、これをもって個体死としての治療行為を
止めることがある。欧米の多くの国では様々な条件がつきなが

らもこれが認められているが、わが国では法的に認められていない。このような状況下では、医療の現場に好ましからざる問題が生じてきている。一方国際的にも医学・医療の立ち遅れと共にその進歩を停滞させているのではないか、対応が消極的でないかと指摘されている。死の概念についての不一致は国々の宗教、哲学、倫理等の相違に基づくものと考えられ、その善悪、優劣を軽々に論ずる説には行かない。ただこの概念を多角的に分析する意味から、本総会では多方面の方々の意見を採聴いたしたい。ただ上述のようにわが国の対応が消極的であるとともに、わが国の医学教育の倫理における教育理念が欧米諸国とは異っていることが推定されるのであって、このことによって、わが国の医学・医療の進歩に将来どのような影響が生じてくるか、これは強い関心を持たざるを得ない問題だと考えられる。

人間の機能、これは身体的機能と精神的機能に分けられるが、脳はこの両機能を合せ持っている。脳は身体の中での特殊な位置づけにおかれていると考えられる。心臓や肺などの器官で行う身体的機能は、それらが生きて機能するためには、脳との結びつきとその協調に依存せねばならないとされている。身体を構成する細胞はひたすらに生きる。その上に、脳のたくみに、わきまえかつよき生ける精神的機能が加わって、私たちは生きている。人が死に至る場合に、その死について上述による医学的根拠をもって死を定義するならば、脳死をもってその基準とすることにそれなりの理由があると考えられる。(本間三郎・第7部会員)

指定発言：脳死の問題がわが国において最近医師界はもとより関係各方面において活発に論議されているが、この背景についてまづ医学・生物学的な解説、具体的には次の4つの問題にしぼって私見を申し上げたい。①脳死と個体死の関係、②脳死判定基準、③脳死と判定されたあとでの医療行為、④脳死と臓器移植。以上のことと関連して脳死のメカニズムの研究とその予防、臓器移植に代るべき新医療技術の開発の重要性などについて強調したい。脳死の問題①②に関しては医師界は充分に審議し合意に到達することが必要であり、それについて③④については更に国民的合意と医師、家族間の理解が必要である。(寺山 宏・第4部会員)

2. 脳死に関する医療上の問題点

医学は医療に直結する。医学に科学的論理性が求められることは当然であるが、医療の対象は人間の生命であるから、倫理的な重みが極めて強い。一般的にいって、倫理観はすべての人に共通ではなく、個々の人の、また同じ人でも時を変れば変動する。医療の行為の意思決定の方法は、医師個人の裁量権にゆだねられているが、新しい課題を抱えて医師が単独では行わない仕組みがつくられている。脳死に関する国民的合意が得られることを医療の現場より望みたいが、そのために、東洋的な宗教・哲学上の問題の整理と、複数の医師と家族の合意があれば脳死をもって死と判断する法的な擁護が具体化されることを切望したい。(水越 治・第7部会員)

指定発言：最近臨床医学の進歩はまことに顕著なものがあり、人類の健康、福祉の増進に大きく貢献していることは周知のことであるが、現実の問題としてわが国民総医療費の急上昇も決して看過できないものがある。脳死判定後の医療的行為についての医療経済面を取り上げて、脳死を社会的に考える資料として提供する。

また、脳死後、心臓停止に至るまでの期間をある手段により人为的に延長させる方法が発見された。こうなると、生命力をもった個体として蘇ることのない脳死状態を半永久的に、医療の対象とする危険性が生じてきることになる。ここにもまた、脳死に関する根本的な議論の必要性がある。(曲直部壽夫・第7部会員)

3. 法律上の視点からみた問題の整理

「脳死の判定指針および判定基準」(厚生省脳死研究班・60年12月)には素朴な疑問がある。①角膜反射に関し閉眼不能の

者については同検査の除外例とし、検査対象から外すべきでないか。②前庭反射に関し投薬の影響によって反射がみられない者については、これをすべて同検査の除外例とするのでなければ、反射がないのは薬物の影響によるものではないとする客観的資料・基準を示す必要があるのではないか。③脳幹反射がみられなくとも脳幹機能がすべて消失しているとは限らず、それを確認するために誘発反応をみるという提案が出されているのに、これを採用しないのは何故か。(中 義勝・第2部会員)

指定発言：①脳死判定基準の要素に一定の時間的経過が加えられていることは、判定基準の不確からしさを示すものとして、社会的合意を得ることを困難にしている。この現状で、脳死説による臓器移植・レスピレーター取りはずしは、法律上正当化しない。②法律上の死の概念は医師の合意に従うのではなく、社会的合意によるべきである。しかし、現在の判定基準では国民の常識となりえない。③脳死の客観的基準が確立して、国民の常識として受け入れられるようになるまで待つか、臓器移植・レスピレーター取りはずしについての医療現場の現実的処理に秩序をもたらすための社会的合意に基づく法律的条件の設定に努力するか、今後いずれの方向を進ぶかが、今の私たちに課された問題である。(澤登俊雄・第2部会員)

4. 倫理・宗教等からみた問題の整理

脳死の問題については、日本の宗教界や宗教学界にどのような意見があるか、宗教学会で取り上げたことがないので不明である。この問題については早急に取組みたいと思うが、ここでは私見を述べる。日本人の宗教心では、肉体をホトケとして拝むことや、遺骨をそのまま神仏と見る見方がある。また、先祖供養を重んじて、これを愈るたたりがあるとの考えも強い。このように死体を宗教的に重視するために、これが臓器移植の障害になっていると考えられる。むしろ、人道主義や博愛慈悲の精神の方向から模索することによって、臓器移植と日本人の宗教心との接点を見出しうと考える。(平川 彰・第1部会員)

指定発言：旧・新約聖書においては、人間も宇宙万象も神によって創造されたとされる。人間が死ねば、もとのちりに帰る。生命のいきの去ったからだはちりであり、そこには特に靈的・精神的な価値はない。宇宙の万象は神の被造物であって、占星術におけるような靈的存在ではない。このような人間観、世界観は一種の非魔化化のたたきをなし、その結果人間の体も星々も科学的な観察・操作の対象となる。

この傾向はキリスト教にはじまる科学的思考、特に“もの”と“心”的二元論によって強められた。近代科学がキリスト教の影響のもとに生れたとされる所以である。しかし、科学が教会の権力から独立し、自己完結的な歩みを始めたとき、その行きつく先はジャック・モノーの“客観的知識の倫理”に見られるようなニヒリズムではなかろうか。

他面、欧米における脳死や臓器移植を考えるとき、他人のために奉仕するというキリスト教倫理の影響があることを忘れてはならない。(中川秀恭・第1部会員)

多数の学協会の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会
(日本学術会議事務局庶務課)
電話 03(403)6291

会員からの手紙

「地球化学」の編集担当を終えて

東京農工大農学部 小倉紀雄

昭和51年から「地球化学」の編集を担当していたが、今年度で辞任させてもらうことになった。毎号、発行が遅れ、満足すべき編集ができなかつたが、数年の経験をもとに反省と今後の課題について述べてみたい。

発行が遅れた最大の原因是投稿論文が少ないとある。5~6編の論文があれば1号を発行できるが、年に2回、それだけの論文の投稿がなかったのが現状であった。そこで毎号「特集」を考え、関連する総説、解説および論文を集め掲載するように心掛けた。最近4年間に実現した特集は次の通りであった。

Vol. 16, No. 2 (1982) 大気中の二酸化炭素

Vol. 17, No. 1 (1983) 東京湾

Vol. 18, No. 2 (1984) 河口域

Vol. 19, No. 1/2 (1985) 地球化学の動行

企画されたが実現されなかつたものに、月の岩石、南極の隕石、サンゴ礁、水-岩石相互作用などがあった。

昨年、将来計画委員会の求めにより、「地球化学」についての意見を述べた。それは次のような内容であり、現在でもこの考えに変りはない。

1. 原著論文

2. 特集

特定テーマの特集を企画し、総説、解説、原著論文を掲載する。

3. 講座

新しい分析法などの紹介、解説

4. トピックス

地球化学および関連分野の新しい話題

5. 学会記事

2~4については毎号掲載したい内容であるが、そのため企画担当の編集委員が、数名必要であり、また内容に応じ編集担当者を決めても良いと思う。

しかし原著論文の投稿が増えれば、編集担当者が苦労することはなくなる。会員の皆様の「地球化学」への積極的な投稿と「特集」の依頼があった時の協力が重要であろう。

#

「地球化学」編集担当委員の交代のお知らせとお願い

東京都立大理学部 石渡良志

昭和61年度より表記のように、これまで長い期間務めていただいた小倉紀雄委員に代わって、編集を担当

することになりましたのでよろしくお願い致します。

さて、「地球化学」誌の現状は前委員が前項で指摘されておられる様に、ほとんど投稿がなく、このままでは発行がむずかしい状態です。「地球化学」は「Geochemical Journal」誌とは異なって、日本語の学会誌でありますので、原著論文の発表の場とともに会員のさまざまな情報交換の場として活用すべきだと思います。そのような意味からも、前委員のいろいろな提案に賛成です。

そこで、改めて会員の皆様の原著論文等の積極的な投稿をお願いしますが、それとともに総説、トピックス、企画などを歓迎します。一報下さい。また「地球化学」担当編集委員を4~5名お願いして、強化する方針であります。

なお「地球化学」への投稿原稿は下記あてお送り下さい。

〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1

東京都立大学理学部化学科

(Tel 03-717-0111)

石渡良志

1986年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日 時： 1986年2月1日 15~18時30分

場 所： 赤門学士会館

出席者： 増田彰正会長、一國雅巳副会長、石渡良志、大隅多加志、梶原良道、兼岡一郎、鎌田政明、木越邦彦、佐藤和郎、清水洋、杉崎隆一、坪田博行、中山英一郎、野崎義行、松葉谷治、松久幸敬、松本英二、水谷義彦、各評議員、鳥居鉄也監事

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 庶務（大隅評議員）

*本会役員交替に伴う日本学術会議・文部省関係の諸手続きをおこなった。

2. 会計（清水評議員）

*前年度決算の後、引継をおこなった。

*今年度の評議員会出席の旅費支給は前年度の例にならうこととした。

3. 編集

（一國副会長）

*G. J. Vol. 19(5)については、発行年度の誤植があり早急に善後策をとった。

*『地球化学』については、原稿の集まりが悪いとのことである。

（松久評議員）

*ニュース106号が刷り上がった。

4. 行事

(野崎評議員)

*2月例会は中止。6月例会は会長講演で、6月14日午後2時の予定。

(水谷評議員)

*本年度年会は10月11日~13日に決定。

5. 日本学術会議関係 (木越評議員)

*IAGCが、"Applied Geochemistry"発刊につき意見を求めてきている。

III. 議事

1. 入退会 (大隅評議員)

*入会 正会員2名: 和田恵治, 三宅 隆

*退会 正会員17名: 秋山悌四郎, 阿部正宏, 荒井康司, 糸魚川忠平, 猪木幸男, 梶谷 敬, 香山 勲, 坂本尚史, 地引久和, 杉浦精治, 鶴見浩一郎, 仲野尚一, 野又 章, 番場猛夫, 二間瀬 洸, 町田喜弘, 水野篤行
以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年10月31日	894	13	7	914
入会	2	0	0	2
退会	17	0	0	17
1985年12月31日	879	13	7	899

2. 役員選出細則改訂小委員会の設置について

*前期評議員会からの引き継ぎ案件である役員選出細則改訂については、一國副会長のもとに小委員会を設置して、早急に措置する必要のある改訂事項は本年度の年会に提案できるよう取りまとめをお願いする事とした。

3. 学会賞設置について

*増田会長から、日本の地球化学の振興と活性化という観点から検討いただきたいと、議題を説明。

*まず、予算面から検討。「86年度予算には基本財産充当積立金として50万円が計上しており、将来賞金を出すような事になった場合にもこれを充実してゆくことで対応できる。その場合学会の法人化が、基金の充実のための寄付受け入れに当たって効果的であろう。」「学会活動の活性化がねらいなのであれば、むしろ賞金はなじまないのではないか。」との意見がされた。

*ついで、他の学会の例を検討。鉱物学会・地質学会・海洋学会・鉱山地質学会・日本化学会の例が賞の種類(対象・賞金額・財源)、選考方法等について議論された。また、本日欠席の秋山評議員の書面による賛成の意見も紹介された。

*ここで、増田会長の私案(例えば柴田賞・日本地球

化学会賞・論文奨励賞・応用地球化学賞・環境地球化学賞・日本地球化学会特別功労賞・教育出版普及賞といった名の多様な賞を設置する。会の財政からの負担はメダルと賞状程度を考える。)が示され、「学会活動の活性化の観点からは功労賞の提案は評価できる。地球化学の周辺の仕事にも光を当て、また学会への求心力となり得るという意味でも多様な賞を設定する方向で推進して欲しい。」「学会誌のためには論文賞をぜひ設置したい。」等の賛成意見が表明された。

*分野間のバランスなど選考に伴って起こりがちな種々の不満への配慮や、多面的な本会の体質を反映した賞のあり方を考えての私案である旨、増田会長から説明があり、増田会長のもとに作業グループを作り、具体的な賞の設置のための案を練ることとした。

4. 科学研究費補助金の部・分科・細目について
*このことについては、変更を日本学術会議から提案できるので本会の意向を地球化学・宇宙化学研究連絡委員会での議論に反映させるため検討いただきたい旨、増田会長から議題の説明。

*地球化学の宣伝普及・アイデンティティの確立といった観点からも重要な問題である事を確認。「地球化学」として、「理学」の中に分科を作る・複合領域もしくは「地球物理学」分科のもとに移す・あるいは「分析・地球化学」はそのままに、別個の細目を別の位置に立てるなど種々の可能性について検討。環境科学会設立や複合領域『海洋科学』新設の提案等の他学会の動向が紹介され、また現状での科学研究費補助金審査の状況も議論された。

*本会と日本化学会との関係についても留意すべきであるとの意見も出され、この場では評議員間での意見交換にとどめ、結論を出すことはしないことにした。

5. その他

*来年度には例会に代えて春季シンポジウムおよび懇親会を開催する事を、幹事会で計画しているとの紹介があり、多数の評議員からこの試みに賛成意見の表明があった。

編集者 松久幸敬
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 鉱床部
電話 0298(54) 3636
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(817) 5801
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 109

1987. II. 10

1987年度日本地球化学会春季シンポジウム

—地球化学の最近の話題—

主催 日本地球化学会

日 時 4月6日(月) 10:00~17:00

会 場 東京大学教養学部 11号館

東京都目黒区駒場3-8-1

(電話03-467-1171, 内線629 締抜邦彦)

コンビーナ 締抜邦彦・増田彰正・一國雅巳・野崎義行

プログラム

午 前 (10:00~12:00)

あいさつ 10:00~10:10 休憩 14:50~15:10
日本地球化学会会長 増田彰正 5) 古气候と海洋循環 15:10~16:05

1) 海嶺の地球化学—ODP掘削孔504Bの成果 10:10~11:05 6) IGBPに関連する地球化学研究について 16:05~17:00

酒井 均(東大洋研) 松本英二(地調海洋地質)

2) 1986年8月のカムルーン・ガス災害 11:05~12:00 懇親会(於 生協食堂) 17:30~19:00

日下部 実(岡山大地球内部研) 会費 4,000円

大隅多加志(東工大理) 懇親会に参加ご希望の方は、同封のはがきにてシン

ポジウム事務局(東大教養 締抜邦彦)までお申込み

ください。申込み締切 3月21日(土)。なお、会費

は当日会場にてお支払い下さい。

午 後 (13:00~17:00)

3) 星の進化と元素合成 13:00~13:55 野本憲一(東大教養)

4) 地球化学と地震予知 13:55~14:50 脇田 宏(東大理地殻化学)

1987年度の日本地球化学会年会および総会は、10月末に東邦大学医学部(東京大森)で開催されます。

